

新春随想



令和のねずみ年 雑感

旭川市医師会 赤羽 弘 充

子育て奮闘記

赤平市医師会 濱口 智 大

朝のコーヒー

旭川市医師会 平井 克 幸

腰痛を持った一匹の大ネズミ

函館市医師会 平田 忍

新年の希望

留萌医師会 藤田 宏 之

還暦か～！

日高医師会 中野 昌 志

5回目の年男の思うところ

深川医師会 谷田 光 弘

72年—何とか、辛うじて—

北広島医師会 戸田 博 豊

還暦に思う：病院統合に向けて

小樽市医師会 和田 卓 郎

開院3年目に向けて

札幌市医師会 本山 修

度重なる自然災害におもう

北見医師会 佐藤 智 信

ワイキチ？

小樽市医師会 門野 雅 夫

オリンピックの年と都市

札幌市医師会 鈴木 勇

The Beatles 解散から半世紀に想う

岩見沢市医師会 古堂 俊 哉

1972年の日の丸飛行隊と掃除の時間の思い出

旭川市医師会 工藤 浩 市

とうとう還暦

千歳医師会 伊藤 昭 英

学会珍風景ほか

札幌市医師会 町田 荘一郎

趣味

胆振西部医師会 中川 英 範

新幹線 はやぶさに乗って

札幌市医師会 續木 徳 子

私の趣味のワインからソムリエ・ドヌールに至るまで

旭川市医師会 原田 一 道

札幌医科大学ラグビー部

函館市医師会 武山 佳 洋

ONE TEAM

北見医師会 荒川 穰 二

カラヴァッジョ展

札幌市医師会 西尾 千恵子

アンペール城塞の天上に消えた音楽—遙かなるインドの思い出

旭川医科大学医師会 西川 祐 司

六十三の手習い

羊蹄医師会 小松 正 伸

伊勢神宮に参拝

石狩医師会 鎌田 覺

北海道は「美しい！」が、「広すぎる…」

上川北部医師会 長島 仁

実り

函館市医師会 小野 武 紀

土に帰る

江別医師会 富山 光 広

昭和35年3月—60年前の思い出—

旭川市医師会 恩田 芳 和

沢の焚火

胆振西部医師会 中村 一 孝

団塊ジュニアの独り言

札幌市医師会 砂押 研 一

パックスジャポニカは来るのか

札幌市医師会 山本 健 治

我が国の病院経営の今後

北広島医師会 竹内 實

惹かれた言葉

江別医師会 大沼 正 和

北見から福山へ、そして、北見に戻る

北見医師会 菅原 亮 一

地域医療への想い

上川北部医師会 酒井 博 司

尊敬する村上幹雄先生

岩見沢市医師会 永森 克 志

(順不同・敬称略)

子育て奮闘記



赤平市医師会
平岸病院

濱口 智大

新年明けましておめでとうございます。今年で3回目の年男を無事迎えることができました。この場をお借りして日々ご助力いただいている皆様方にお礼申し上げたいと思います。

私事で恐縮ですが、昨年9月に無事第一子が生まれ、現在も妻と共に育児に奮闘する毎日を送っております。

思い返してみると、昨年1月に妻の妊娠が判明し、それから家事を役割分担するようになり、時に妻が不調な時は、料理を担当することも度々ありました。一人暮らしのときは『料理＝日持ちがして腹が減った時に気軽に食べられる物』ということでカレー・シチュー・ハヤシライスのヘビーローテーションを繰り返していたことがありましたが、さすがにそれをやるわけにもいかず、某インターネットレシピサイトを見ながら料理をしていました。しまりのない味だと思ったら塩を入れ、何か味が足りないと思ったら塩を入れ…塩は偉大な調味料だと思知らされました。

そうこうしているうちに里帰り出産のために妻が実家へ戻り、束の間の一人暮らしに。食事も一人暮らしの時に逆戻りし、カレーなどを作っていましたが、さすがに飽きてきたため、たまに外食へ…行こうとするとたいてい妻から「気を付けて飲みに行ってきたね」と電話がかかってくる事が多く、妻の愛情の深さを改めて感じながら自宅で晩酌をする日々を送っておりました。

これまでも夜な夜な本屋で某育児雑誌を立ち読みし（同じ職場の方に目撃されることがしばしばあったとか…）知識はあったつもりでしたが、実際9月に長男が生まれてからは毎日が初めての連続で、沐浴やおむつ替えもぐずる息子と格闘しながら妻の介助を受けながら何度もトライし、妻が息子に母乳を与える時は家の家事の手伝いをし、世のお母様方はすごいなあとは何度も感じながら日々を過ごしております。

今年は息子にとって良い見本になれるよう、家事でも育児でも仕事でも頑張っていきたいと考えておりますので、公私共々皆様のご指導・ご鞭撻をいただければ幸いです。

皆様にとりまして本年が幸多き年でありますよう、お祈り申し上げます。

朝のコーヒー



旭川市医師会
はらだ病院

平井 克幸

コーヒーに目覚めるきっかけは、旭川西武デパート（現在閉店）のカタログギフトでいただいたコーヒー豆です。南青山のミカフェートのワインボトルのようなビンに入った商品で、蓋を開けた直後の香りに圧倒されました。

旭川市内に在住しておりますが、市内および近隣にはスペシャルティコーヒーの自家焙煎をする店が増えてきており、飲み比べをしています。

学会の出張の際時間があるときは「はしご酒」ならぬ「はしごコーヒー」をして地域のコーヒーを楽しんでいます。いくつかの店をめぐりましたが、神戸三宮のコーヒー処カフェのブレンドコーヒーが最高でした。残念ながら現在閉店されています。サードウェーブのコーヒー店も国内でも数多くなりましたが、店によっては味が薄すぎて紅茶のようなテイストになっているものもあります。

札幌のM店のG先生から1日がかりのコーヒー教室にて学ぶ機会があり、ゲイシャ種を含む10種類のコーヒーを試飲させていただきました。香りとコクの微妙な違いはワインの試飲会のようでした。抽出は大変奥の深いものであり、素人が練習しても丸2年を要するそうです。G先生の抽出法はコーヒードリップパー内に挽いた粉の塊の上にお湯をそそいだ後蒸らすのではなく、ヘラで40秒かき混ぜてから抽出する方法です。ミルはハリオやデロンギ社の粗挽きから細挽きまで段階に調整できるものが優秀とのことで、以前使用したことがありましたが、メンテナンスの都合で現在メリタのコンパクトタイプの自動ミルを使用しています。微調整は困難ですが、時計とにらめっこして、振って粉を均一にする操作を加えています。

恵庭のC店でも購入しており、U先生からのメールで勉強しています。こちらは半分抽出したコーヒーをお湯で2倍に薄めるという簡単で、かつ再現性の高い方法です。時間のある休日はネルドリップを使用しています。ペーパーフィルターよりマイルドな味わいとなり、至福のひと時を過ごしています。

毎朝ペーパーフィルターによるハンドドリップをしておりますが、後片付けの時間を含めると、15分はかかります。朝ドラ（おしんとスカーレット）をゆっくり観て、朝刊に目を通すことが難しいのが、つらいところです。味の採点は妻にまかせており、顔をうかがいながら、コーヒーライフを楽しんでおります。

腰痛を持った 一匹の大ネズミ



函館市医師会
平田皮膚泌尿器科医院

平田 忍

昔は、一家に三匹ネズミがいると、一家は一生金に困らないとの諺があった。現在わが家には、ネズミは私、大ネズミ一匹と孫ネズミだけである。ただ孫ネズミは横浜に住んでいるため、ここ函館には私大ネズミ一匹である。少々寂しい今日この頃である。70歳の時の古稀は過ぎ去り、77歳の喜寿にはあと5年ほどある。

大学時代には、フェンシングと軟式テニス（現在はソフトテニスという）、大学卒業後は出張の1年間、夜精神科の後輩と毎夜テニススクール（今度は硬式テニス）で運動していたが、その後のビールなどにより体重の減少には至らなかった。少し堅肥りにはなったが。その後地元である函館に帰り、10年父と一緒に診療を行った。父の時代は皮膚泌尿器科であり、私の時は皮膚科であり、常に話が咬み合わず、いつもケンカをしているようであった。肝臓ガンが判明してからの1年間は、さすがにケンカをしなくなった。平成元年、昭和天皇のご逝去、昭和の歌姫・美空ひばりが亡くなった年に父も旅立った。平成から令和の時代が変わり、本年は令和2年である。この年に次男と一緒に開業するため、新しくクリニックを建てている。皮膚泌尿器科という科は現在無くなっている科であるため、皮膚科クリニックに改名することにした。以前の父とのこともあり、息子と仲良くするように、気をつけるつもりである。

昨年は仮診療所を作っている最中、突然、左臀部上部の激しい痛みと左下肢の痺れ感が生じるようになってきた。ペインクリニックの後輩へ早朝受診し、治療をいろいろしていただいたが、すぐ痛みが再発する状態であった。患者さんとは、イスに座っている時は痛みはなく、立ち上がった瞬間と、歩き始めの第一歩に激しい痛みがあり、ベッドのところで患者さんの診療をする際に座ると、立ち上がる時には気合いがいる。リリカと ترامセットを飲んでいてもつらい状態であった。休日に本屋に入り、本を物色しようとした瞬間に痛みが走り、立ち止まってしまった。すぐ車に戻り、痛みが軽くなるのを待った。このままでは駄目だと考え、知人医師の話を聞き、決心してある東京のクリニックの門を叩き、腰部脊柱管狭窄症の診断を受け（3カ所）、愛知県犬山市にて内視鏡下脊柱管拡大術（MEL）を行った。約1週間で仕事に復帰することができた。今回の手術で今までの腰痛対策における手術の概念が大きく私の中で変わってしまった。私の術後の状態から同

じく激しい腰痛に悩む友人が早速受診し、手術を受け、やはり経過が良く、ゴルフを開始したとのことである。私も安心した次第である。このように科を問わず、新しく治療法が開発され、大学レベルのものが一般開業医のレベルへと移行してきている。私の科である皮膚科では、アトピー、乾癬、爪白癬、掌蹠膿疱症などの治療に新しい波が押し寄せてきている。今までの治療に甘んじることなく、頑張っていこうと思っている。

われわれの職業には定年はなく、自分ができるならばそれこそ90歳の先輩医師のいる時代である。まずは電子カルテから始めるつもりである。同年代の先生たち、共に肩の力を抜いて、これからも頑張っていこうではありませんか。

新年の希望



留萌医師会
藤田クリニック

藤田 宏之

新年になりまして、どう過ごそうかと毎年、抱負を考えますが、なかなか新しいことができずに、毎年過ぎております。

今年は何か新しいことをしたいと思い、カフェ巡りをしています。コーヒーなど喫茶店メニューが好きですが、地元では店がないので、旭川や札幌などに出かけた時にいろいろと店に入っています。この頃、喫茶店の雑誌も出ていますので、買っているものと見えています。

旭川に行ったときには昔ながらの椅子と雰囲気好きな喫茶店があったのですが、閉店してしまいました。若い人には人気がなかったのでしょうか。

この頃はタピオカが人気で、店の前に行列ができていますが、若い人が多く、60歳になろうかという私ではとても似合わないの、行列がないときに買っています。私にはタピオカがない方が良いでしょう、味の無いデンプン玉のようで、おいしさがわかりませんでした。

この頃はデパートの喫茶店で昔ながらの店に行ってしまう。知り合いはいないはずですが、地元の医者先輩がたまにいらっしゃいます。やはり、同じようなところにたどり着くのでしょうか。私が落ち着けるような喫茶店は郊外でないとならないのでしょうか。私の喫茶店探索は新しい年になり、さらに進みます。良い喫茶店がありましたら、ご報告いたします。

それでは今年も元気に過ごしてまいりましょう。

還暦か～！



日高医師会
新ひだか町立静内病院

中野 昌志

皆様、明けましておめでとうございます。今年もよろしく願いいたします。

突然医師会より執筆依頼があり、何故自分にと戸惑いましたが、年男の会員から偶然選ばれたとの内容であり、「あー、そういえば還暦だったな」と改めて気付かされました。

誕生日が年末なもので毎年年男としての認識に乏しく、自分でも[年男]とは呼ばず[子年の年末生まれ]と称してきました。

同様に[還暦]もいまだにピンと来ず、執筆している現時点ではまだ1年以上も先の行事であり、どんな気持ちになるものか想像もつきません。

思えば自分が子供のころの60歳位の人って、すごく老けて見えて普通の意味でもお祖父ちゃん・お祖母ちゃんだったし、大人を超えた人っていう感じだったなあと記憶しています。

では今の自分はどうかだと顧みると、外見は「年に見えない」とよく言われます(笑)。運動はほとんどしなくなりましたが音楽活動は続けており、ポールやB'zのライブに行ったりカラオケではシャウトして騒いでおります。まだ子供は社会人になっていないし、当然孫の顔も見られるのはかなり先のことでしょう。大人だと思っても時々自覚に欠ける行動があったりと、あの頃の60歳より幼稚化しているのではないかと思わされることもあります。

視力低下・腰痛・不整脈・高血圧症・糖尿病・脂質異常症・AGAと、老化現象と服用薬はどんどん増えてくるのに改善していく要素は何も見当たりません。

それでも折角の還暦というチャンスですから、名の通り赤子に戻った気持ちになって、今までに経験したことのない何か新しいものを見つけることに注力し、これからの人生の糧にしたいなと思います。

ただこれは理想的な老後の目標とはなりますが、叶えられるとは限りません。

そこで取り敢えず現実的な目標としましては、子供が社会人になるまでの現役診療の継続、その途中で何か見つかるものがあればラッキーと考えることとします。

ちょっと緩いけど、ご同感いただけますよね？

5回目の年男の 思うところ



深川医師会
空知総合振興局保健環境部 深川地域保健室

谷田 光弘

道医師会員の皆様、いつもお世話になっております。今年もよろしく願いいたします。執筆依頼で、自分も60歳、還暦になることを思い出しました。そう言えば、最近は町を歩いていても若者に後ろから追い抜かれ(歩幅が狭くなった?)、段差のないところでつまずき(足が上がっていない?)、新しいことを始めるのは億劫で(うつ?)、体力、気力ともに着実に衰えています。

12歳、24歳、36歳、48歳とこれまで4回も年男の時はあったはずですが、ほとんど意識したことはありませんでした。

その頃、何をしていたかを思い出そうとしてみましたが、①12歳(小学生)：ほとんど印象に残っていることがありません。②24歳(医学生)：試験前くらいは勉強もしていたのですが、楯円球をただただ追いかけていた記憶しかありません。③36歳(臨床医)：結婚して子供もいましたが、覚えているのは仕事上のことが多く、家族との記憶は、子供が大病をして、かなり長期に入院していた頃のことが多く、私も仕事大好き人間だったのかもしれませんが④48歳(臨床医)：重度心身障害児・者の方々の医療的ケアをしていました。基本的に③の時期と同様で、家のこと、子供のことは妻任せであったと思います。⑤60歳(行政官)：50歳を過ぎてから、行政の道に入り、保健所勤務を始め、現在に至っています。思考パターンは臨床医の時とほとんど変わっておらず、いまだに行政官になりきれず、悪戦苦闘しています。

その時々にくらか努力もしたとは思いますが、還暦に至るまでの自分の歩みを考えると、学生時代は学友に、臨床医の時は先輩医師、同期、後輩医師をはじめ、多くのコメディカルや事務職員の方々に支えられ、行政官になってからも、多くの同僚職員や周囲の方々のサポートによって、なんとかやってこられたというのが本当のところでは、心より感謝です。

今の気力、体力では6回目の時までには、仕事はとっくにリタイヤしているものと思いますが、可能なら、60歳～72歳を思い返したときに、妻をはじめ周りの人々に、聖書が「人からしてほしいように、人にする」と述べる黄金律に沿って、自分も少しは行動ができたかなと感じられるようでありたいと思っています。

72年 —何とか、辛うじて—



北広島医師会
西の里恵仁会病院

戸田博豊

「心の欲する所に従えども矩を踰えず」のよわいをふたとせ重ねることになった。田舎の葬式は盛大だった。50歳台で死んでいた。私は21世紀を見ることは無い、と思っていた。幼稚園。行きたくなかった。毎朝、駄々をこねていた。母は飴玉を持たせるのだが、行きたくなかった。向かいの「たずちゃん」が誘いに来るので仕方なかった。2人で物も言わずに歩いて行った。お絵かきの時間、何もしないでいた。何を描いて良いのか、浮かんでこない。先生が心配そうに寄って来る。思いついてリングを一つ描いた。毎日、毎日、リングを一つ。また、先生方が寄って来る。運動会、お遊戯、じっと立っているだけ。先生方が寄って来る。小学校2年の時、石川富美代先生が産休の代用教員でやって来た。「起立!」。ガチガチの直立不動だったのだろう。「戸田君、力を抜きなさい」とか仰った。次の日から通学できるようになった。母は事あるごとに「石川先生のお陰で」と。毎日、野球で明け暮れていた。夕方は、波止場で釣りをした。山で、目白と鶯を捕った。

中2で大阪に転校した。言葉が通じない。標準語なんて話したことがなかった。できるだけ喋らないようにしよう。友達も欲しいと思わなかった。学校へは行きたくなかった。夏休みが終わったが、学校に行けない。母は「明日は行くんやで、明日は行くんやで」。2～3日は行けなかった。それでも高校で1人、大学で1人と、私の方は関心がなかったが、面倒見の良い友人が居た。最近、分かった。過去世で近しい人たち。大学を卒業しても就職できなかった。世の中に出られなかった。アルバイトで身過ぎをした。この先の人生をどうして生きていったら良いのか? 毎日、うつうつ。医者になろう。医者になった。なれて良かった。なんとかこの71年間を生きてこれた。

登校拒否、引きこもり、自閉症、対人恐怖症、鬱。70を過ぎてから分かった。私はこの地球にやって来て、まだ3回目の人生であるということ。慣れていない。「レンタルなにもしない人」は、今回が2回目の人生。マトモに生きていけるはずがない。この世で活躍している人は20回、30回と経験豊かである。野球の大谷選手は20回目。スポーツ選手にしては人間性も高い。転生回数が多ければ、またこの世で地位の高い人は、高ければ人間性も高いという訳ではない。

市井に埋もれている人の中に、精神病患者とされている人の中にも驚くほど人間性の高い人がいる。外

来で「私に会社員は勤まらないナア」と呟いたら、すかさず看護婦が「そうです。勤まりません」「……」。

この71年間、何とか辛うじて生きてこれた。神様に感謝します。私を支えてくれた人たちに感謝します。ありがとう。

還暦に思う： 病院統合に向けて



小樽市医師会
済生会小樽病院

和田卓郎

1960年、昭和35年生まれ私、この1月に還暦を迎える。昨年、一足早いお祝いの会を職員が盛大に開いてくれた。赤いちゃんちゃんこを着せられ、気恥ずかしいやら、嬉しいやら。まだまだ若いつもりでいたが、肉体、特に目の衰えは確実に押し寄せている。手術ではルーペ、関節鏡モニターの助けがあるので不自由は感じないが、書類、書籍、PCの画面が良く見えないし、疲れる。老眼鏡のCMではないが「字が小さすぎて読めない!」と叫びたくなる。

今年8月、済生会小樽病院は、同一法人の重度心身障がい児施設「西小樽病院みどりの里」と合併統合する。老朽化した西小樽病院の当院敷地内に新築・移転によるもので、済生会小樽病院は現在の258床から120床増の378床になる。異なる文化を持つ2つの施設の統合は、容易ではない。価値観の衝突もあるだろうし、業務改革と意識改革が必須である。しかし、それを乗り越えて、済生会が目指す質の高い医療、福祉、介護を一体提供する体制を作っていきたい。人口減少、少子高齢化が著しい小樽の中で、済生会小樽病院が立地する築港地区は商業施設ウイングベイ小樽、グランドパーク小樽があり、コンビニ、ファミリーレストランの開業も相次ぎ、数少ない発展が期待できる地域である。医療施設を核とした健康街創りにも貢献していきたい。

プライベートでは50を過ぎて本格的に始めたゴルフが上達しない。昨年、やっと100切りを果たしたものの、全くの停滞である。還暦の今年は、ぜひ安定して90台で回りたいものである。

人生100年時代と言われる今、還暦は人生の折り返し地点にすぎない。そう自分に言い聞かせ、日々を楽しく、楽天的に送っていきたい。



開院3年目に向けて



札幌市医師会
アイルこころのクリニック 本 山 修

今年で4回目の年男となり、このたび原稿依頼をいただきました。医師として働き始め20年、自己紹介もかねて振り返ってみました。

北海道滝川出身で、楽しそうだなと思い沖縄の大学に行き、人よりも長めに学んだあと北海道に戻り、平成12年春に札幌医大の神経精神科に入局しました。大学の研修のあと、釧路赤十字病院や手稲溪仁会病院、岩内協会病院で勤務をしました。総合病院は大変だったなあというのが素直な感想ですが、大学が違い他科の先生との知り合いがない自分としてはそこで知り合った先生方に助けてもらったことや意見交流ができたことが大変ありがたかったです。その後はいくつかの精神科単科病院で働きましたが、自身の中にある神経症的傾向や生活スタイルの再考などあり、平成30年2月より中央区の街中で“アイルこころのクリニック”というメンタルクリニックを始めました。それまでは統合失調症を診ることが主体でしたが、クリニックでは不眠や不安、過緊張などの症状が多く、またそのために学校や職場にいけないといった問題を扱うことが増えてきました。何をもちて治ったのか？ 何をもちて問題解決と言えるのか？ 傍から見ると不透明に見えることもあると思いますが、自分としては極力自分自身での問題解決の能力を高めることであると思っています。薬の効果も使いようによっては非常に効果的ですが、依存性には常に気を付けるようにしています。つい先日“身の丈発言”が話題となりましたが、過度な理想像は自信を苦しめることも少なくありません。

1年ほど前、知り合いの雀士と麻雀を打っていたとき、その日は調子が悪く上がれずに不満を漏らしていたら「身の程を知りなさい」と言われハッとしました。腕前もそうですが、ツキの流れにも身の程があるとのこと。なるほど、自分が勝負事に弱いわけだと氷解した気持ちになりました。

卑屈にならず、あまりたくさん欲しがらず、今の自分を受け入れる。自分にも言い聞かせ、クリニック3年目に突入したいと思います。

度重なる自然災害におもう



北見医師会
北見赤十字病院 佐藤 智信

本稿の執筆依頼をいただいたことで、来たる年が自身の干支に当たることに改めて気づき、天皇陛下の即位礼正殿の儀が執り行われている日にこの原稿と格闘しております。

昨年は平成から令和へと新しい時代へ移り変わり、消費税増税やラグビーワールドカップでの日本代表の活躍など、さまざまな出来事がありました。しかし時代は変わっても、私たちの平穏な日常生活を一瞬にして奪取してしまう自然災害は相変わらず発生しており、慶事の中継の裏では台風19号が残した爪痕の映像が流れています。平成30年の「今年の漢字」に「災」の字が選ばれたように、先の平成は自然災害が相次いだ時代といわれ、平成3年の雲仙普賢岳火砕流にはじまり、記憶に新しいところでは東日本大震災や熊本地震、平成30年7月豪雨など数々の災害が発生しました。私自身は東北岩手の出身ですので、東日本大震災の折にはさすがに実家の無事を確認し安堵はしましたが、これまでは映像の中の遠く離れた日本のどこかでの災害の様子を目にしながらも、まさか自身が生活している場に災害などは、と半ば他人事のように考えていたことは否めません。

しかし、平成30年9月6日に発災した北海道胆振東部地震によりその考えは改めさせられ、災害に対する意識も変化しているように感じます。契機となったのは発災2日後に赤十字社の救護班員として厚真町へ派遣され、被災地の現実をカメラのレンズを通してではなく、自分の肌で実際に感じてきたことが非常に大きかったと思います。救護班員とはいえ、災害医療のいろはも知らずに被災地へ乗り込んだ一小児科医に何ができるわけでもなく、現場で飛び交う「共通言語」の意味すら分からずに彼の地で過ごした4日間は、これまでの自然災害、災害医療に対する自身の認識の甘さを自戒するには十分な時間でした。

現在、救護班員としての任は解かれています。それ以来災害関連の書籍に少しずつですが目を通すようになり、また赤十字社の医学総会ではこれまでほとんど興味のなかった災害医療関連の発表を拝聴するようになり、さまざまな職種の方々の災害への関わり方を勉強させていただいています。災害大国日本では、もはや「災害のない年」を望むことは現実的ではないのかもしれませんが、自身としては自然災害がいつでも、どこにでも発生しうるのだという認識を忘れずに持ち続け、身近でできる防災対策を無理のない範囲で今年も進めていければと考えています。

ワイキチ？



小樽市医師会
小樽老人保健施設はまなす

門野 雅 夫

「ワイキチ」。突然この言葉を聞き、何のことだろうと思う方がほとんどだろう。実は「ハワイアン音楽」をこよなく愛し、それにぞっこんのめり込んでいる「ハワイアンキチガイ」の輩の略称で、後年、ハニー・アイランダーズの大橋節夫氏から聞いた言葉である。

実は小生もその一人で、バンドを組み、スチールギターを担当していた。われわれ学生時代（60数年前）は、ハワイアン全盛期であった。安価な弦楽器の編成で、趣味を共にした友人同士でバンドも組み易く、また、当時は各大学に必ず一つはハワイアンバンドがあった。余暇を利用しては練習し、時々、各大学の運動部主催のダンスパーティに出演する機会もあり、図々しくも下手丸出しで演奏していたが、今にして背筋が凍る思いである。

他大学のバンドと共演する時もあり、その都度、彼らの音の素晴らしさを感じ、自分たちの音には全然進歩は見られなかった。所詮「下手の横好き」で始めたため、やはり不完全な弦のチューニングや正確なコード進行およびテクニックの欠如等が進歩を妨げてきたと後年気付いた。進歩がないまま飽きも来ていたが、そうこうしているうち、学業の方も忙しくなり、まして医師になってからはその業務にも追われ、バンドどころではなく、いつしかハワイアンのことも忘れていた。

それから30年くらい経った時だろうか、ハワイアンのライブの店に顔を出したところ、そこには専属のプロがいた。また、昔、ほかの大学の顔見知りのバンドマン連中や、中年のワイキチ連中も多数いて、彼等はセミプロのレベルになっており、そこで「札幌ハワイアン同好会」なるものを結成していた。私も早速入会し、ここで初めてプロやセミプロたちと音合わせをさせてもらった。正確なチューニングとコード進行でリズムを刻む彼らのバックの音に、スチールの音は乗せやすく、彼等は演奏全般をリードしてくれる存在であった。学生時代のバンドでは味わえないものがあつた。しかし、この時は既にハワイアンブームは過ぎ去っていた。同好会としては、時々中央よりプロを個々に呼び、これらを機に中央との接点が、以前に比べ非常に近くなっていた。また、上京の際には、プロの経営するライブの店を訪れると、やはりそこにはわれわれと同じ学生時代バンド活動をしていたワイキチの人たちも見えており、プロをバックに演奏されていた。後日、私もその仲間に入れてもらった。かつては、レコード・ラ

ジオ・テレビの世界の人たちであった中央のプロと目の前で話ができ、また、共演もできる等、学生時代とは隔世の感があつた。しかし、小生69歳の時、現在の介護施設を託され、以来13年あまり、拘束の状態になったため、ハワイアンの演奏活動はできなくなつた。ふと気付けば、80半ばに迫る年齢になりつつあり、かつてのワイキチ青年も意欲はもちろんのこと、気力・体力等も衰えた老人になってしまつていた。ただただ過去を懐かしむのみである。

オリンピックの年と都市



札幌市医師会
にしの内科クリニック

鈴木 勇

今年は2回目の東京オリンピックの年です。巡り合わせで子年には夏のオリンピックがありますが、私が生まれた年はローマであつたようです。次の子年はミュンヘン、そしてロサンゼルス、アトランタ、北京、東京と続きます。あつという間です。今年還暦を迎えることになっていますが、大部分の患者さんはまだ私よりも年上です。それで還暦の感想などよりも20代で旅したローマのことを書きたいと思います。

ローマではかなり貧乏そうな格好で歩いていたのですが、それでもスリに遇いました。ぼろぼろの小銭入れに日本円にして50円くらいしか入れてなかつたのでスリもがっかりしたと思いましたが、バチカン市国で会つた日本の大学生にこの話をしたら、「イタリア人に背中を向けてはいけない」と教えられました。歩くときは壁を背にして歩くようにと。

街では遺跡の多さにも圧倒されましたが、働き方が日本とはだいぶ違う印象でした。街を歩く警察官はスリなどを取り締まる様子はなく、両替に行つた銀行では女の子と話すのに夢中な男性銀行員に随分待たされました。一瞬いらつとはしましたが、彼の優先順位に同意できない訳でもなかつたので、これもありがたという心境でした。

ローマでの最後の滞在日の夕方、ホテルの部屋が暑くてテルミニ駅前夕方涼みをしていたら、荷物を置き引きされたいらしいお婆さんが大声で叫んでいるのが聞こえてきました。事情を聞きに駆け寄つた駅員の青年に「パスポート…」とか訴えているようでした。スイカの屋台が出ていたので、一切れ食べて帰ろうと屋台のお婆さんからスイカを受け取り食べようとした瞬間、おいしそうな赤い部分がポロリと路上に落ちてしまいました。よほど悲しい顔をしたのか、何か分からない言葉をがやがや言いながら彼女がもう一切れ差し出してくれました。これで私のローマの印象はだいぶ良くなったのです。

The Beatles 解散から半世紀に想う



岩見沢市医師会
岩見沢市立総合病院

古堂 俊哉

今年は東京で2回目のオリンピックが開催されるとのこと、スポーツには全く門外漢の小生でも、開会式・閉会式にはいささか興味はある。cool Japanとかでアニメやゲームのキャラが大挙して盛り上げるのか？ロンドン大会の時はブリティッシュロックのビッグネームが大挙していたが、彼我の差はあると感じる次第である。その時の圧巻はPaul McCartney演奏するところの‘Hey Jude’だったのは記憶に新しいところだ。というわけでやっと表題につながる。

The Beatles—wikipedia 誌面の都合にて略(知らなければ自分で検索してください)

この4人組は20世紀の奇跡であり、大衆性と実験性を兼ね備えた稀有なバンドであり、現在のポップミュージックのほとんどは彼らに行き着く。ちょうどカンブリア爆発が現在の生物の多様性に結びついているのに喩えることができるのである。プログレヤヘビメタルはもとより‘Give Peace A Chance’やラップの‘Everybody’s Got Something To Hide Except Me And My Monkey’はパンクの各々プロトタイプとみることができる(いささかこじつけ)。

今からちょうど50年前にこの世紀のグループは解散している。当時HBCで夕食の時刻に「国際ニュース」というのを放送しており、そこで解散のニュースを見た記憶がある。そして40年前、小生が大学に入る年の1月、Paul McCartney&Wingsの待望の日本公演があったのだが、マリファナ所持が見つかり、成田から投獄→本国送還。当然コンサートは中止でファンを落胆させる。この事件で幕を開けた1980年は、ファンにとってさらなる衝撃が襲う。ジョンは5年間専業主夫として家事・育児に専念していたが(イクメンの走りか)、この秋頃から音楽活動を再開しており、新譜も好評だった。その日、下宿で夕食を食べていると、点けてあるTVのニュースでやたらジョンが映っているので「さてはまたクスリでつかまったかな…」とっていたら、何とファンに射殺とのこと、さっそく友人の下宿に集まり追悼集会(単なる酒盛りなのだが…)。ラジオを点けるとあちこちでジョンの追悼番組がかかっていたが、多くの番組では「天国のジョンを偲んで」‘Yesterday’や‘Hey Jude’をかけていた。「それはPaulの曲だろうが!」「天国のJohnも苦笑だ」「きぐしねいです」とラジオパーソナリティに悪態

をついたものだ。

世間ではJohn Winston Lennonという人を愛と平和の使者と捉えているが、彼には結構辛辣でブラックな面があり、自身を自己矛盾の男と言っているぐらいだ。そもそもアルバムの冒頭で「争いのない世界を想像してごらん」と言っておきながら終盤の曲で長年の友人をディスる曲を収録しているぐらいだ。こんな面倒臭い人物とつきあえるのはポールやリンゴのような脳天気な人間でないといけない。ジョージの写真にやつれたものが多いのは胃に来ていたのかもしれない。

流石に脳天気なポールも、バンドの解散の時と同様、一時期かなり辛い時期を過ごしたとのことだが、その後は自ら書いた詞の如く(‘The movement you need is on your shoulder’ ‘Boy, you’re gonna carry that weight’)、ビートルズの遺産を背負って頑張ってきたが(‘95年のAnthology project~最近の50’th Anniversary issue)、いくら脳天気で長生きしそうな彼にも、残された時間は短いかもしれない。ポールが亡くなったら、喪に服して休診にして一日中ビートルズナンバーを聴き倒して過ごそうと思う。院長許してくれるかな?こっちがお陀仏になる方が先かもしれない。新年早々縁起でもないか…。

ジョンがもし今でも存命ならと妄想する。世界で進む断片化、ネットを見ても他国の人々に対するヘイトで満ちあふれている昨今、トランプ政権に何を言っただろう?

この稿をしたためにあたり参考にしたティムライリー著「ビートルズ全曲解説」‘TELL ME WHY’ A Commentary of the Complete Works of The Beatlesに興味深い一節がある。締めくくりとしてこれを引用しておく。

‘われわれをもっとも人間的にするのは人とのつながりであるとビートルズは語りかけているような気がしてならない。つまり、人との交流がわれわれの人間性のいちばん大きな部分をなしとげるのだ。’

1972年の日の丸飛行隊と 掃除の時間の思い出



旭川市医師会
介護老人保健施設フェニックス

工藤 浩市

2020年東京でオリンピックが開催されます。幸運なことに、日本で開催される4回目のオリンピックに居ることができる予定です。TVでたくさんの名場面をみましたが、札幌生まれの私は、やはり1972年（子年）の札幌オリンピックの日の丸飛行隊を思い出します。

切り込み隊長はカミソリジャンパーの金野選手。ポーンという音とともにスタートから飛び出し、両手を前に出したクラウチングスタイルで滑走します。腰を上下し、リズムをとっているようです。「ウァーッ」。飛ぶ時の掛け声は人さまざまでした。飛行中、スキーはぴったりと揃えてあり、着地のテレマーク姿勢がきれいでした。次に青地選手。今のようにヘルメットではなく、ぼんぼりのついたスキー帽でした。なかなかハンサムだった青地選手は、「飛ぶときに口はあけるけど、声は出さないんだよ」と当時同級生の情報通が言っていました。1本目を終わって、笠谷、青地、金野、藤沢と上位を独占し、笠谷選手の二本目のジャンプ。「さあ笠谷、金メダルへのジャンプ」「アアッ」「飛んだ決まった！」冷静なアナウンサーがかなり興奮したようでした。日本金銀銅独占。それまで冬季五輪のメダルは1つだけだったわけでしたから、日本中が歓喜に沸きました。

この様子を、小6男子は放課後の掃除の時間に実況付きで物まねをやるわけです。当時は男子より女子の方が体も大きかったし、大人でしたから、「ちょっと男子ーい、掃除真面目にやりなさいよ」「ちえっ、うるせーなあ、この××××（今の時代では表記できません）」。しぶしぶすしは掃除をするのですが、そのうちにヨーグルトの紙ぶたを何枚も重ねて貼り合わせ、黒いビニールテープで補強したパックと箒で、別なゲームが始まります。「じゃぱーん、あいしんぐ」。意味は知らないけど、よく耳にした言葉を口にしながら。

しかし、夢のような時間は突然終了します。「コラッ、何してんだ！ここに並べ！」。赤鬼のような先生と、フンと薄笑いの女子たち。しょんぼり男子3人は愛情たっぷりのご指導を頂きました。体罰禁止？なんのことでしょう、の時代の思い出と共に。

とうとう還暦



千歳医師会
市立千歳市民病院

伊藤 昭英

人生の秋である。あくまで個人の感想だが、長いこと苦勞してきた割に収穫がさっぱり、というものの一つに英語がある。医業もそうだが、と言うと患者さんに失礼かもしれないのでここでは止めておく。小学校低学年の頃だと思うが、当時住んでいた苫小牧市内のキリスト教会で外国人牧師が子供を集めて英語を教えており、母は私をそこに通わせた。嫌ではなかったが、「リンゴは『アップル』のはずなのに『アポウ』と聞こえるのはなぜだ」と悩んでしまい、素直に吸収できない子供だった。中学になると授業で文法を習うようになり、理屈が分かるのは楽しかったが、高校になると習った理屈では説明が難しい言い回しが多くなってきて、いちいち考えこむのだった。こういうタイプは会話が上達しないことを、以後身をもって知ることになる。

英会話学校や教材もいくつか使ったが、今はNHKラジオ第2のみである。この十数年聞き続けている番組が「実践ビジネス英会話」で、題からすると商談の進め方みたいだが、米国での職場の人間関係や社会のトレンドなど多彩な内容で面白い。NHKなので優等生的なセリフばかりのきらいはあるが。去る10月後半の話題は「変容する病院」で、「友人が『マイクロホスピタル』に入院した」という話で始まった。何だそりゃ、と思って聴くと、十数床の1泊用病床を持って、救急、産科、外科などを行う施設とのこと。それで採算がとれるのか、と思うが、従来の総合病院は大きなICUと化しつつある、という話も出てくるので、そちらは費用がかかりすぎることなのか。また、遠隔医療の普及も速いようで、専門医が双方向のビデオを使って複数のICUや新生児室を監督するそう。在宅患者を毎日24時間モニターすることもあるようで、それでかなりレベルの高い治療が受けられるのだそうだが、もし実際何か処置が必要となったら飛んでくるような医療職（NP、PAなど）が充実している、ということなのか。

これらの変革を促しているのは結局のところ経済性とのことだが、この番組では最後に歴史上の人物の名言をとりあげており、そこで「職業は給料をもたらすものではなく、あなたが地上に遣わされた使命である」という画家ゴッホの言葉が紹介されていたのは皮肉だろうか。ゴッホは存命中貧乏だったらしいが。

学会珍風景ほか



札幌市医師会
平松記念病院

町田 莊一郎

一般演題を若手医師が発表後、座長からフロアに質疑を促したが、フロアから手を上げる人は誰もいなかった。そこで座長から質問したが、返答に困っている様子なので、言葉を替えて質問し直したが、壇上でもじもじするばかりで、一言も声を発しなかった。フロアに共同演者がいるはずだが、答える人は誰もいなかった。ややしばらくして座長は演者を解放した。フロアでその様子を見ていて、私も体を硬くしていた。

大学にいた頃、学会にはよく出席し、一般演題の発表を何度かしたことがある。質問されても、幸い立往生することはなかった。

またあるセクションで一般演題を若手医師が発表した。フロアから質問が出た。それに対する演者の言い分がふるっていた。

「私はこの内容について何も知らない。ただ、発表しろと言われて発表したまでだ」

これを聞いてフロアにいた主任教授があわてて立ち上がり「失礼しました」と苦笑しながら謝り、質問者に対して解答した。

何回か学会に出席していると、たまにはこのような風景にお目にかかる。フロアでぼんやり演題を聴いていて、このような風景に遭遇すると目が覚める。

これからは学会とは関係のないお話。若さゆえに起きたこと。

誠・みさお夫婦と信夫・こずえ夫婦が海外の新婚旅行先で親しくなった。8日間の日程で、ある地で3日間滞在し、その間いっそう親密になった。旅行が終わって、みさおは両親に挨拶に行った。ところが連れてきた男性は新郎ではなかった。信夫とみさおが意気投合し、旅行先で鞍替えしてしまった。

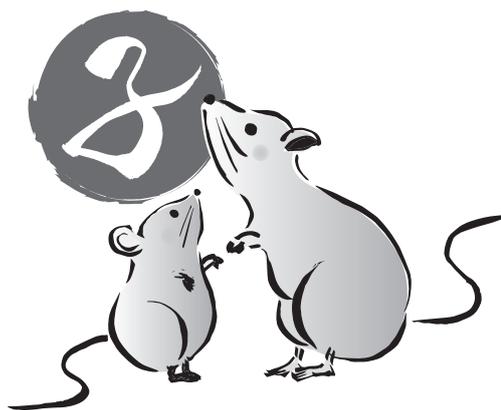
これは私が海外旅行をした時、添乗員から聞いた話である。

もう一つ別のお話。

大学医学部を卒業した彼は1年間のインターン生活を関西の病院で送るため、青森に向かう青函連絡船に乗った。出航後彼はデッキに出た。春風はまだ少し冷たかった。近くに若い女性が現れたので、彼はその女性に話しかけた。最初とりとめのない話をしてしたが、彼はインターン生で、これから関西の病院に赴く途中だと打ち明けた。彼女は東京へ行く予定で、近く結婚するフィアンセの男性と一緒にとのことだった。フィアンセは客室の畳で眠ってしまっ

たので、デッキに出てきたのであった。話をしているうちに打ち解け合い、彼は彼女が好きになったと告白し、一緒に関西まで行こうと言った。いきなりそんな話をされたので、彼女はうろたえてその場を去ろうとしたが、彼はその腕を放さなかった。彼はこんなに女性を好きになったのは初めてで、どうしても放したくないと懇願した。彼女の方もこのように激しく愛の告白をされたのは初めてで、気持ちがぐらつき出した。真剣そのものの彼の目つきにほだされてしまい、彼について行くことに決心した。彼女は自分の小さいスーツケースを取りに行ったら、フィアンセは目を覚ましていたので、化粧直しをしてくると言ってその場を離れた。2人はなんとかフィアンセの難を逃れて、青森駅で関西行きの列車に飛び乗り、列車が出るのを待った。列車の中にキョロキョロまわりを見回している男性が来たので、彼は彼女を座席の下に隠し、近くの客にも協力してもらって見つけさせなかった。その男性、フィアンセらしかった。彼は男性が下車して別の列車に向かったのを確認した。やがて列車は出発した。彼は協力してもらった客に事情を話した。皆面白がり、彼女をしっかりとつかんでいるように励まされて、笑いの渦に包まれた。一連の騒動で2人はぐったりし、朝まで眠ってしまった。

関西の宿舎に着いて、2人は初めて互いに自己紹介した。



趣味



胆振西部医師会
三恵病院

中川英範

以前なら、趣味は？と尋ねられたら、即座にゴルフと答えていた。ゴルフは36歳で始めた。すぐに夢中になり、暇を見つけては練習場に通り打ちまくった。始めた時の年齢の半分のハンディになれば、普通のレベルだと言われていたが、才能はどうやら人並みだったようで、オフィシャルハンディが17に下げられた。この頃は絶好調で十勝のゴルフ場だけでなく道内の種々のゴルフ場でプレーを楽しんだ。ところが、止せばいいのに院内対抗のソフトボール大会でアキレス腱を断裂、ギプス固定を余儀なくされた。その翌年には虫垂炎破裂の汎腹膜炎での緊急手術を受けることになった。しばらくできないでいるうちにすっかりゴルフ熱が冷めてしまった。元来が熱しやすく冷めやすい性質なのだと思う。

今度は、日帰り温泉にはまってしまった。十勝川温泉、菅野温泉はもちろん、屈足温泉、土幌温泉、糠平温泉、足寄温泉、晩成温泉、留真温泉、トムラウシ温泉、芽登温泉など、週末は家内と二人、日帰りで温泉を巡ったものである。すっかり遠くなってしまったが、お勧めは大樹町の晩成温泉で、褐色の温泉と太平洋を望む露天風呂は最高である。

34年間勤めた帯広厚生病院精神科を定年退職、平成25年から伊達で暮らしている。洞爺湖温泉、登別温泉は昔から入っているが、ここではやはり伊達温泉に始まり、豊浦温泉、室蘭温泉、北湯沢温泉、丸駒温泉、支笏湖温泉、上の湯温泉、ニセコ温泉、昆布温泉、雪秩父温泉などがある。温泉入浴後の麺類、中でもラーメンはたまらなく美味である。

伊達は北の湘南、噴火湾に面しているからか温暖な気候で、十勝の気候と比べたら別世界の感がある。雪はほとんど積もらない。市役所前の歴史街道の街路樹はなんと柿の木である。10月には柿がたわわに実る。渋柿で会津産の身不知(ミシラズ)という品種、集めて防虫・防臭剤を作るとのこと。20年程前から一般家庭でも柿の栽培が始まり、ここでは富有柿、庄内柿が採れるようだ。

伊達に移住してすぐに自分への褒美と新車を購入した。この10月で7年目になるが、走行距離は1万3千キロになった。時間があれば、日帰り温泉巡りを楽しんでいる。

職場の健診では腹囲が3cm増加、メタボ予備軍と指摘された。今年は6巡目の子年、72歳になる。ダイエットに真面目に取り組みたいと思う。

新幹線 乗って はやぶさに



札幌市医師会
川端医院

續木徳子

昨秋、台風15号のため千歳便が欠航し、新幹線に乗り換え、小さな旅をしました。

当日11時、気象庁が首都圏に暴風雨予想発表。14時、子供からADO欠航の連絡。16時、スマホで搭乗便ANA欠航を確認。急いで東京駅に向かいます。エキュートは閉店時間を18時に早めたため、お弁当売り場は行列。改札口・みどりの窓口は、終電時刻のアナウンスが繰り返され混雑しています。

私は、19時20分発東京～札幌の乗車券を購入。ただ、新函館北斗～札幌へのJR接続がなく焦りました。札幌への夜行バスは満席で増便はなく、ホテルも満室状態。タクシーを利用する方法もありますが、朝まで時間をつぶし函館本線に乗り込むことに決めました(駅近くのホテル・ラ・ジェント・プラザ函館北斗1階は北斗市観光協会が緊急災害と判断すると開放されるそうです)。

列車は大宮を通過し、街灯りがまばらになってきます。白石蔵王駅付近で、新函館北斗駅まで迎えに行くよと、天の声が届きました。私は最高速度320キロの列車にいます。間に合うのでしょうか。

グリーン車の座席は広く、設備が充実し、ゆったり過ごせました。iPadで検索すると、盛岡で、緑色のはやぶさと赤色のこまちの自動分割併合装置による切り離しを見学できることに気づきました。絶好の撮影スポットです。停車時間が4分のためドキドキしながらホームに降ります。やはり物好きな人がいました。秋田へ出発するこまちを見送りながらオーッと歓声をあげています。感慨にふけると乗り遅れるので車内に飛び乗ります。そこで販売員の方と話すと、イントネーションが異なり東北新幹線に乗車していることを実感します。そして列車は、トンネルを走り抜ける音を響かせながら進みます。

新青森駅出発後はJR北海道の管轄となるアナウンスが流れ、青函トンネルもあっという間に通過。また、新函館北斗駅到着前に、夫から駅に着いたと連絡が入ります。東京～新函館間は3時間58分、新幹線より車の方が速いのでしょうか。駅南口はタクシーが数台だけで暗く、一人では心細かったかもしれません。霧の中を運転してくてくれた夫に感謝です。これからも情報収集して、心に残る旅をしたいと思っています。

私の趣味のワインから ソムリエ・ドヌールに 至るまで



旭川市医師会
はらだ病院

原 田 一 道

令和二年の今年は、十二支の中で一番目の子年であり、我ながらもうこんな年齢なのかと、まさに「光陰矢の如し」の心境である。

北海道医報新年号「新春随想」を書くようにと依頼され、何を書いてよいか迷ったが、気軽に私の趣味であるワインに関連することを多少書くことでお許しいただきたい。

30代半ばまでは、甘口のドイツワインを好んでいたのが、30代後半に、ブルゴーニュ地方のモレ・サン・ドーニ村にドメヌ（醸造元）がある特級ワインのクロ・ド・タールを先輩方と飲んだ時に、何とも言えぬ香り、色調、味覚に魅了されたのが強く脳裏に焼き付いており、ピノ・ノワール単一で作られる赤ワインを数年に渡り、かなり飲んでいた。

シャルドネという葡萄で作られるブルゴーニュの白ワインも好きで、白ワインの王様と呼ばれるモンラッシェの出来栄は素晴らしい。

ブルゴーニュの赤ワインで一度は飲んでみたい最も高価（130万円位）で、高貴なロマネ・コンティの名を知っている方も少なくないだろう。

このロマネ・コンティを作っているドメヌは、Dom. de la Romanee Conti (DRC) であり、赤ワイン7種類、白ワインのモンラッシェ（100万円位）など、いずれも生産数が極めて少なく高価である。

しかし、40代前半にボルドー地方のいわゆる五大シャトー（Ch）と呼ばれるCh・ラフィット・ロッシールド、Ch・ラトゥール、Ch・マルゴーの3本

を大先輩の先生方と飲む機会があり、複雑な香り、色調、味覚に再び感動しボルドーファンとなった（葡萄はカベルネ・ソーヴィニヨン、メルロ、カベルネ・フラン等のブレンドで作る）。

ボルドーには約8千のChがあり、そのベスト5が五大シャトーと呼ばれ、一級はCh・ラフィット・ロッシールド、ラトゥール、マルゴー、ムートン・ロッシールド、オー・ブリオンの5つである。私は優しく、繊細でもしっかりした味のボルドーの女王と呼ばれるCh・マルゴーが一番好きだ。

こうしてワインを飲むだけでなく、ボルドー、ブルゴーニュ地方の畑の位置や土壌の特徴、ヴィンテージ・年の気候条件などの書籍もかなり読み、ワインの魅力は底知れない。

そうした中、2017年5月の札幌で、日本ソムリエ協会（田崎真也会長）から、ソムリエ・ドヌール（名誉ソムリエ）の称号をいただき感激した。

ソムリエ・ドヌールの称号をいただく方の目的は、国内外の著名な方に、ワインや日本酒など飲み物の楽しみ方を広く伝えていただくとともに、協会の主旨、活動を知らしめていただくことあり、対象はワイン、日本酒などの飲み物の普及とソムリエの育成に功績のあった方、また今後飲食業界並びに協会の発展のためにご尽力いただける方となっている。

ちなみに道内に関係のある叙任者を挙げると、2010年に、上田文雄氏、倉本 聡氏、佐藤のりゆき氏、高橋はるみ様、橋本聖子様、2017年に秋元克弘氏、伊藤亜由美様、葛西紀明氏、原田一道、丸谷智保氏、2019年に、河合秀基氏、アリョーナ・ブズドゥガン様、安田里沙様、吉田晃敏氏が選ばれている。写真は昨年、旭川で開催された就任式で前列右側に吉田晃敏旭川医大学長、後列右から2人目が田崎真也会長、左端が私である。

アルコールの飲めないワイフからは、「貴方の職業は何ですか？」と言われる昨今で終わりとする。



札幌医科大学 ラグビー部



函館市医師会
市立函館病院

武山佳洋

新年あけましておめでとうございます。4回目の年男ということで寄稿させていただきます。

昨年はラグビーワールドカップ（W杯）が開催され、日本代表のベスト8躍進に日本中が熱狂したのは記憶に新しい。今回、大学時代に関わりその後の半生に多大な影響を及ぼしている「ラグビー部」について書いてみたい。

幼少時から運動が苦手な高校までインドア文化系だったが、大学では体育会系の部活に挑戦しようと考えた。その頃は第一次ラグビーブームで、テレビで明治大学のウイング吉田義人選手を観てあこがれた。大学入学後にラグビー部の門をたたいたことで、その後の人生や価値観が大きく変わった。

ラグビー部は第1回W杯が開催された昭和62年、進学ロビー（通称進ロビ）にたむろしていた学生の集まりから自然発生的に創部されたらしい。ラグビー経験者は2名程度で、他は野球、ゴルフ、スキー、吹奏楽、帰宅部など多彩なメンバーが集められた。最初はルールが分からず、試合での初トライはインゴールでアメフトのようにボールを地面に叩きつけ、ノックオンの反則に終わったという逸話もあった。私が入部した平成2年は創部4年目で、先輩方は皆いかつくて医学生に見えない集団だった。

練習はきつく、毎日ついて行くのに必死だった。基本的な動きを教わった直後、入部2週間くらいで試合に出された。創部者から「球持ったら前に突っ込め」「球は前に投げるな」「あとは気合だ！」と言われた。訳が分からず怖かったが、夢中でボールを追いかけ、楽しくもあった。

バックスの華麗な走りにあこがれて入部したが、鈍足でセンスもなくフォワードに配属され、スクラム最前列のプロップに落ち着いた。どんな人にもポジションが当たるのがラグビーの長所であり、その後は筋トレに明け暮れた。スクラムはただの押しあいに見えるかもしれないが、組んだ者にしかわからない難しさと奥深さがある。自分で押すよりも正しい姿勢で組むことが大事で、そうすれば仲間が後ろから押してくれる。気付いたのは5年生になってからで、選手としては芽が出ず引退となった。

練習後の飲み会も容赦なかった。「稽古だ！」と言われながら大盛りメニューを食べ、ビールが進まないと言われ飲み干し、酎ハイは注文禁止（薄めた酒は気合が足らん）であった。理不尽のオンパレードで、ここには書けない武勇伝

も多数ある。今なら〇〇ハラスメントと言われそうだが、陰湿ないじめや暴力等はなく、不思議な一体感があり楽しかった。

当初は試合で負け続けていたが、部員が増えて強豪校の経験者も入り、だんだん強くなった。東日本医科学学生体育大会（東医体）では4年時（平成5年）に念願の初勝利を挙げ、ベスト8に進出した。6年時（平成7年）には惜しくもメダルは逃したが4位に入った。

卒業後は離れてしまったが、下手糞でもラグビーを経験したことは一生の財産である。One for all, all for one やノーサイドといったラグビーの精神はもちろん、体育会系のしきたりや粘り強さ、チャレンジ精神を学び、これらは社会に出てから大いに役立った。スクラムの組み方も、現在携わっている救命救急センターの運営に通じるところが多いと思う。泥だらけで一緒に楯円球を追いかけた仲間には固い絆があり、さまざまな場面で助けられることが多い。

私から見て滅茶苦茶・理不尽トップ2だった先輩は、現在お二人とも札幌市内の医療法人で理事長を務めておられる。理不尽に見えた言動の裏には愛情があり、人を惹きつける魅力や経済合理性も備わっていたということなのであろう。

昨年のW杯札幌開催では、医務スタッフの大半をラグビー部OBが務めた。私も観客救護室で微力ながらお手伝いでき、光栄であった。札幌開催のさなかに創部者の還暦祝いが催され、部員とOB約50名が集まった。皆カンタベリーを着て、あちこちでラグビーについて熱く語っている。現役部員の身体を張った余興も健在である。みんなラグビーが大好きなんだと改めて感じ、嬉しかった。

創部30年を経てOBは100名を超えたが、現在のラグビー部は部員減に悩んでいる。今回のブーム再燃を機に盛り返し、さらに歴史を刻んでもらいたい。このままラグビー人気が続いて、存命中にもう一度、日本でW杯が開催されるといいなあ。決勝は日本対オールブラックスだと最高だ。その時は観戦か医務どっちがいいかな…などと夢見ている。



創部者の還暦祝いにて

ONE TEAM



北見医師会
北見赤十字病院

荒川 穰 二

新年、明けましておめでとうございます。昨年は、ラグビー W杯が日本で開催され、彼らの直向きなプレーから元気、感動、勇気をもらい、ONE TEAMがラグビーのみならず、あらゆる分野に求められていることを感じた。

昨年5月に開催された第75回北見医師会定時総会において、令和元年度の基本的活動方針が採択された。目標は、【全医師会員参加型のチーム医療による地域医療への貢献】とした。今野会長の「現状の医師会活動は理事と少数の先生が主に関わっている状況に思える。もっと広く会員全員に活動を知ってもらい、また開業医の先生と勤務医の先生の交流をさらに深めたい。慢性的な医師不足の状況においては、皆が手に手を取り合って、地域医療を支えることが大切と思う」とのお考えを受けて作成した。まさに、全北見医師会員によるONE TEAMで、時代を先取りしたと思っている（原稿を書いている昨年の11月18日時点で、令和元年の流行語大賞をONE TEAMと予測）。

昨年5月31日に開催された経済財政諮問会議で、根本厚生労働大臣は、2040年を展望した医療提供体制を三位一体で推進と述べ、I. 地域医療構想の実現に向けた取り組み：2025年までに医療施設の最適配置の実現と連携、II. 医師・医療従事者の働き方改革（2024年からの医師の時間外労働に対する上限規制）、III. 実効性のある医師偏在対策（偏在是正の目標年：2036年）を挙げた。特に医師偏在に関しては、三次医療圏・二次医療圏ごとに、全国ベースで客観的に医師偏在指標を提示し、それに基づき都道府県で計画を検討するとしている。医師偏在指標は、医療需要及び将来の人口・人口構成の変化、患者の流出入等、へき地等の地理的条件、医師の性別・年齢分布、医師偏在の種別（区域、診療科、入院/外来）を考慮して算出。しかし、公表予定であった数値は派遣実態を考慮していない、さらに数値そのものが実態とかけ離れていたため、暫定値、精査中として公表された。実際、昨年9月に開催された北網圏域地域医療構想調整会議医療専門部会においても、資料に提示された数値が実態と異なる、と委員からの指摘があった。また、一昨年より開始された新専門医制度において、医師の偏在を是正するために専攻医の募集定員に上限を設定するシーリングが、本年から北海道でも導入されることとなった。具体的には、麻酔科医が上限23名のシーリング対象となった。

また脳神経外科医も他の地域に比し充足しているとされており、将来、シーリングの対象となる可能性がある。今回のシーリングに関しては、北海道の麻酔科医の現状を把握しているとは思えない。麻酔科医は手術麻酔のみを行なっているのではなく、救急集中治療にも携わっていることが全く考慮されていない。また脳神経外科に関しても、本州とは異なり脳梗塞を含めた神経内科領域の疾患の診療を行なっている実態も把握していない。医療提供体制を三位一体で推進するという耳触りの良い言葉のみが先行し、地域の実態も把握しないで、机上の数字のみで政策が行われる危険性を感じている。

今、まさにONE TEAMとして全医師会員参加型のチーム医療を推進し、現状の地域医療体制を見つめ、地域から中央に情報発信すること、さらに医療の現状と問題点を、分かりやすい形で地域住民に明らかにし、ともに解決のために協力し合うことも大切である。本年が、その第一歩を踏み出す年となるよう、微力ながら努力したい。



カラヴァッジョ展



札幌市医師会
西尾皮膚科医院

西尾 千恵子

2019年、8月10日から10月14日まで道立近代美術館で、カラヴァッジョ展が開催されました。ご覧になった先生もおられると思いますが、カラヴァッジョについて紹介させていただきます。

カラヴァッジョは、日本では誰もが知っている画家ではありませんが、ヨーロッパでは、レオナルド、ミケランジェロ、ラファエロといった、ルネサンスの三大巨匠をしのぐほどの認知度と人気を誇っています。

日本では、2001年に1回目のカラヴァッジョ展が開催され、2回目は、2016年、国立西洋美術館で「ルネサンスを超えた男、カラヴァッジョ展」として開催されました。

今回は3回目の日本での開催で、「カラヴァッジョエスキ（カラヴァッジョ派）」と呼ばれる、カラヴァッジョに影響を受けた画家たちの作品も同時に多数展示され、彼が当時の画家たちに、いかに大きな影響を与えたかを紹介しています。

カラヴァッジョ（1571-1610 38歳没）はミラノの近郊の町、カラヴァッジョで生まれ、北イタリアのミラノで絵の修行を始めました。当時、北イタリアは、写実的な静物画の伝統があり、そこで写実表現に精通したとされています。

21歳で、ローマに出て当時の人気工房に入り、花や生物の描写を分担していましたが、すぐに辞めローマで極貧生活を送ることになります。当時描いた風俗画が、ローマでもっとも名高い美術愛好家であるデル・モンテ枢機卿の目に留まり、庇護を受けます。

枢機卿の邸宅で、私的コレクションのための静物画や人物画を描いていましたが、枢機卿のはからいで、1599年、コンタレリ礼拝堂の祭壇画『聖マタイの召命』『聖マタイの殉教』を、油彩画で描くチャンスに恵まれました。教会を飾るための、初めての祭壇画でしたが、絵が公開されると、ローマ中で大評判になり多くの人が、一目見ようと教会に殺到し、カラヴァッジョは一夜にして、ローマ画壇の寵児になったといわれています。

『聖マタイの召命』は、キリストが「私についてきなさい」とマタイに呼び掛ける聖書の一場面を描いているのですが、キリストの顔はほとんど描かれず、建物に斜めから差し込む強い外光が、神を象徴させています。キリストが入ってきた空間は、当時の居酒屋のような場所であり、そこにいる人物は当

時の市井の人々を思わせます。聖書の物語があたかも自分たちの生活の場で起こった出来事であるかのような印象を与え、今までの古典主義で描かれた宗教画とは全く異なった斬新な作品となっています。

その後も、礼拝堂の壁画の注文を受け、ローマ最高の画家と呼ばれるようになりますが、短気で狂暴な性格からさまざまな暴力事件を起こします。1606年には殺人を犯して死刑を宣告されてローマから逃亡し、没するまで南イタリアを転々とする逃亡生活を続けることとなります。

この間も多くの大作を描き、マルタ島では、マルタ騎士団の依頼でサンジョヴァンニ大聖堂に畢生の大作『洗礼者ヨハネの斬首』を描き、カラヴァッジョ芸術の頂点と言われています。

1610年、恩赦を求めてローマへの旅の途中、海岸に倒れ、38歳で死去します。

カラヴァッジョは、当時の様式化したルネサンス絵画（マニエリスム）からバロック美術へと、西洋絵画の歴史を大きく転換させたと言われます。彼は「最初の近代画家」にして、「進歩ではなく、革新によって進んだ画家」と評価されています。彼の革新性はさまざまな側面がありますが、中核は二つ。

それまでになかった斬新な光の扱いと、理想化を排し、ありのままを描く冷徹な写実（自然主義）です。

カラヴァッジョが、ローマを去ってからも、彼の手法をまねる画家たちが、ヨーロッパ中から集まり、カラヴァッジョ主義はヨーロッパ絵画の流行になりました。

フランドルのルーベンスは、ローマでカラヴァッジョの作品を見て、その様式を発展させ素晴らしい祭壇画を多数描きました。

ローマに来たオランダ人は特にカラヴァッジョ様式に強く感化され、ユトレヒトに帰ってこの様式を展開させ（ユトレヒト派）、17世紀オランダ絵画の黄金時代をもたらしました。レンブラントの内面的な明暗様式も、フェルメールの光への感受性も基本的には、カラヴァッジョエスキの延長線上にあると私は考えています。

西洋美術史におけるカラヴァッジョの位置づけについて、私見交えて紹介させていただきました。

アンベール城塞の天上に 消えた音楽—遙かなる インドの思い出



旭川医科大学医師会
旭川医科大学 病理学講座腫瘍病理分野

西川 祐司

37年前の夏、私は友人2人とともにインドに滞在していた。マニラ経由でコルカタに入り、国内線に乗り換えてムンバイに移動した後、鉄道を使ってカルカッタに戻り、バンコク経由で日本に帰る約4週間の旅であった。帰国するための航空券を予約しているだけで、おおまかな旅程は決めていたものの、駅に行って二等、三等列車の切符を買い、ホテルは現地に着いてから観光案内所などで探すという、今から考えるとかなり危なっかしい旅行であった。でも不思議なもので、我々はあまり不安を感じることはなかった。若者特有の怖いもの知らずということもあるかもしれないが、当時はテロ事件の恐れも少なく、インドの国内も比較的安定していて、人々は貧しかったけれども純朴で穏やかであった。

我々の旅の主な目標はエローラ、アジャンターの石窟寺院群、アーグラのタージマハール、ヴァーラーナシーの沐浴場を訪ねることであった。これらは言うまでもなく素晴らしく、予想に違わない、もしくはそれ以上の強烈な印象を残してくれた。そして、一眼レフで大量に撮影したカラー・ポジのスライドを見ることにより今でも鮮明に記憶を呼び覚ますことができる。

今回、書きたいと思ったのは、失われてしまった音の思い出である。我々は石窟寺院群を見た後、デカン高原を北上し、ジャイプールに入った。ハーワ・マハールという風変わりな建築物やジャンタル・マンタルという古い天文台で有名なこの街の近郊にはアンベール城塞があり、我々はバスに乗ってそこを訪ねた（ジャンタル・マンタル、アンベール城塞はその後、世界遺産に登録された）。城塞の下の水辺でサリーを着た女性たちが洗濯をしているのが印象的であった。帰り際、バス停留所の近くで、帽子をかぶった男性がこれまで私が見たことのない弦楽器を使って、エキゾチックな音楽を演奏していた。この世のものとは思えないような音が響き渡り、私はただただ聞き惚れていた。出発時間が迫り、バスに乗り込んだのだが、驚いたことにその男性がバスの窓越しに私に楽器を手渡した。どうも200ルピーで売っても良いと言っているらしかった。インドでは当たり前な値段交渉として、100ルピーでどうだと言って、100ルピーを上げたのだが、彼は首を横に振っていた。しかし、次の瞬間、バスは容赦なく出発してしまった（あと50ルピーくらいは余分に払う気持ちがあったのだが、いまだに申し訳なく思っ

ている)。手に残ったのは、椰子の実を半分に割って皮を張りつけた本体に木製の柄がつき、金属の弦と共鳴弦が張ってある手作りの擦弦楽器であった。これは弓とともに無事に日本に持ち帰り、現在も自宅に飾ってある。彼の演奏していた音楽は、その後数日間私の頭の中で鳴っていたが、次第に消えてしまい、もはや思い出すことはできない。もちろん当時はビデオのような便利な機器は存在しなかったのだが、せめて携帯録音機を持っていれば良かったと悔やまれる。しかし、美しい音楽の印象だけは乾燥した荒涼とした風景の記憶とともに残っている。

以上のように、私は医学部6年の夏休みのほとんどをインド旅行に費やしたことになる。現在では考えられないが、当時は、少数派ではあってもこのような無謀なことが可能だったのである。私は生まれて初めて異国を旅し、たくましく生きるインドの市井の人々に畏敬の念を抱いた。この経験は、その後の私の生き方に少なからず影響を与えている。また、旅行中には自分の将来について考えを巡らすこともあったが、これは結局私が病理学の道に進むことを後押ししてくれた。久しぶりに当時を振り返り、若い時代に冒険をして良かったと心から思っている。



六十三の手習い



羊蹄医師会
昆布温泉病院

小松正伸

ひょんなことから、書道を始めてしまいました。元はといえば、9年前の自分の病気。ステージIVと診断されて、大病院に6ヵ月間入院している間、私の奥さんはほぼ毎日自宅と病院を往復してくれました。そのために20年ほど親しんでいた書道を、きっぱりと止めてしまいました。私は先進医療の恩恵と、病院のスタッフの方たちの細やかな治療や励ましのおかげで、なんとか生きて退院できました。

自宅に帰ってみると彼女の書道部屋は、高価な筆や大きな紙が積み上げられて、主を待ちながら淋しそう。このまま彼女が筆を折れば、みんなただの燃えるゴミ。それじゃあんまりかわいそう、もったいない。1年ほど体力の回復を待って、自分も書道を始めるから、奥さんも再開しようよと誘い出しました。悪筆が少しは直るかとの、淡い期待も。

かくて彼女の師匠、中野北溟先生の教室に晴れて入門させてもらいました。中野先生は当時88歳、近代詩文書では日本の重鎮、96歳になった今も現役です。そして同じく指導者として、高橋陌遥先生がおられました。教室で男性は、先生たちと私だけ。周りは年上・年下のおば様たちですが、ただのおば様じゃあない。皆さん、数十年のキャリアと輝くような受賞歴を持っている方たちです。そんな中で私は、中学を卒業してから書道は初めてという、なんとも心もとない年食った新入りでありました。もちろん直接の師匠は奥さん。紙の大きさ、墨の色、筆の手入れなど道具から筆の持ち方など、一からの厳しい指導が続きました。まずは、基礎の臨書から。普段でも家でのパワーバランスから言えば、奥さんの方がずっと上だったのが、このハンディにより私の存在はますます弱小化したのであります。ですから私の使っている筆は、いまだに奥さんの使い古し。

お二人の先生に優しく教えられ、周りのおば様たちのほめ上手に乗せられていくうちに、だんだんと書くことが楽しくなってきました。賞状を集めることに興味はないのですが、公募展にもたまに引かかるようになりました。真っ白い紙の上に黒い墨で自在に描かれる造形の美しさに、書道の深みを知りました。書の作品は二次元ですが、その中には書き手のリズムや息づかいなど別な世界が広がるのが、少しだけ分かるようになりました。

近代詩文書は、言葉選びから始まります。奥さんを含めた先輩たちからは、花鳥風月や自然の美を織り込んで、字面の見栄えがする言葉を勧められます。

でも地域での医療に長く携わってきた私は、どうしてもメッセージ性のある言葉を選んでしまいます。生命の移ろう哀しさ、生命を育てくれる自然、生命を守るための環境や平和を願う、先人たちの言葉を書で表現したい。この強い思いはあるのですが、技術が未熟で書けないもどかしさを嘯みしめています。この悔しさから、ますます書にのめり込んでしまいそうです。

近代詩文書を初めてご覧になる方は、なんと書いてあるかたぶん読めないでしょう。まるで、子供のなぐり書き。でも、近代詩文書の原則は「読めること」。解説されれば、白と黒の織りなす美しさ、筆使いに表された“静中動”に気づかされるでしょう。

さて、8年経って私の悪筆は改善されたかという、結局ちっとも変わりませんでした。「悪筆というものはない、それは単なる個性」という誰かの言葉を信じましょう。それでも書を始めてから、実に多くの忘れた字、書けない字、読めない字、意味の分からない字があるのかを思い知らされました。まさしくパソコンの弊害。アナログの究極である書道を目指す以上はと、スマホで簡単に調べるデジタル時代に抗して、なるべく辞典を引いて語源までをたどるようにしています。そしていつか師匠である奥さんを連れて、西安の碑林博物館を訪れ、顔真卿や王羲之の碑を、間近に見たい、触れてみたいと願っています。

前回年男の時には、65歳くらいで海外ボランティアに行きたいと高邁な思いを綴って、同期の医者にほめられたのですが、病気になってあえなく断念。さて、次の年男では何を書こうか、と思い悩む前に、まずその時この世に生存していなくては。この拙い文章を読んでくれました皆様、どうぞご健勝に過ごされますよう、そして次回作をご期待ください。



伊勢神宮に参拝



石狩医師会
鎌田内科クリニック

鎌 田 覺

令和元年10月22日、天皇陛下の「即位礼正殿の儀」が皇居内で執り行われ、新聞・テレビのトップニュースで大きく報道された。

この日は国民の祝日となり、私共は休みを取って念願の伊勢神宮に参拝していた。皆様ご存知の通り、この神宮は天皇のご先祖である天照大神が祀られており、2000年の歴史があり、日本人の心のふる里として年間1,000万人の参拝者が全国から集まり賑わっている。

今回私共の旅は新千歳空港からジェット機で中部国際空港に約1.5時間で到着、レンタカーを借りて姪の夫の運転で高速道を約2時間の旅であった。

60数年前には私の父も参拝しており、当時は列車の旅で、青函連絡船で青森に渡り、再び列車で伊勢までは2日がかりの旅であった。今は交通機関の発達により便利な世の中となり、父の時代と比べると隔世の感がある。

さて伊勢は海辺の街で、背後には穏やかな山並みが続き、車を降りるとふる里の田舎に帰った時のような懐かしい思いに満たされた。

パック旅行でガイドさんを手配しており、早速外宮からご案内していただく。ガイドさんの指示で左側通行で玉砂利を踏んで奥へ進む。この神宮は天照大神の食事を司る豊受大神が祀られているといわれ、私には男性的な雰囲気を感じられ、別宮（遙宮）参拝所の亀石を発見した時は須佐男尊の出雲がふと頭に浮かんだ。

内宮に移動して五十鈴川に架けられた宇治橋を渡り皇大神宮に入る。今度は右側通行で玉砂利を前に進む。千古の森に囲まれた静かな佇まいで、今も天照大神がご鎮座されており、優しい女性的な雰囲気を感じられた。20年に一度お宮を新しく建て替える式年遷宮が1300余年続けられている。

次に猿田彦神社を参拝する。天孫民族をこの伊勢の地にご案内した神である。この日の参拝者の多くは日本人で、外国人の姿はほとんど見られなかった。

さて数年前、私はわが家の家系図を作成したことがある。わが家のルーツは岐阜県高山市と白川郷の中間に位置する山村で白山の麓にある。戸籍の保存期間が150年のため、また菩提寺が火災に遭い過去帳が燃えてしまい、わが家の祖先は7代前の250年くらいしか遡れなかった。

この時、計算機を使って、私の祖先の数を計算してみたことがある。私共には父と母の2人が存在し

て、現在の私の命がある。両親には更に父母が2人ずつ存在している。計算機で $2 \times 2 = 4$ 、 $\times 2 = 8$ 、 $\times 2 = 16 \dots$ と20回ボタンを押すと100万人となる。ということは、私共の20世代前には親族が100万人いるという計算となる。あと10回押すと10億人の祖先がいることになり、30世代前というとな人が20歳で子供を産むとすると600年前となり、10億人の祖先の数となり、私共はその祖先と親戚関係になり、つながっていることとなる。昔々の古代の時代には天皇家と兄弟の関係にあったとしても不思議ではない。そして本家から分家ができ、分家が更に本家となり分家を作り…と、幾世紀にわたって現在につながっていると考えると、天皇家が総本家でわれわれ国民が分家となる。本家はいつも分家の幸せを祈り、分家は本家を敬って現在があると思ひ、伊勢を後にした。今回の旅は姪夫婦と私共夫婦で、私は7回目の年男、姪は6回目の年女であった。宿は「斉王の宮」という王朝文化をテーマにした高級ホテルで、ちょうど私共夫婦結婚50年の節目にあたり盛大にお祝いいただき感激した。

帰りには父母の眠る京都の東本願寺にお参りした。京都は外国人の観光客であふれていた。次に大津市の認知症の90歳の姉を見舞い、相次ぐ台風、大雨による水害の被災者の皆様のことを思い、暗い気持ちで帰路についた。

参考文献：日本のルーツ飛騨 山本健造原著 山本貴美子編
裏古事記-ねじれねじれて二千年 山本貴美子著
福来出版（一般社団法人飛騨福来心理学研究所）出版部



右端：筆者

北海道は「美しい！」 が、「広すぎる…」



上川北部医師会
士別市立病院

長 島 仁

明けましておめでとうございます。令和になって初めての新年を皆様どのように過ごされましたか？

私が「昭和」に医師を志し、徳島で学び、「平成」に北海道の豊かな自然に憧れて移り住み、無我夢中で患者の診察、治療を行い、知らない間に「令和」という新しい時代が変わり、自分自身もいよいよ「還暦」を迎えようとしています。

あらためて北海道に来てからの自分を振り返ってみると、1994年に札幌に住んで以来、ほぼ単身赴任生活を送り、その間に二人の娘はとうに成人を過ぎてしまいました。

2012年からは道北の士別市立病院に勤務し、8年間で過ぎようとしています。2016年に病院長、2018年には病院事業管理者に任命され、田舎の地域医療を守らなければならない一方、その重圧が日に日に増してきています。

ふと、思いつき私が事業管理者として、1年間に出張、帰省を含めた移動距離がどのくらいになるものか、ざっと計算してみました。

士別－札幌間 往復 400km×50回＝2万km

士別－東京間 往復 2,000km×20回＝4万km

合計6万km

何！ 確か昔に地球1周約4万kmと習った気がするが…。

その他にも出張で九州、広島、名古屋にも行き、往診業務で市内を回るときに1日に100kmを移動することも度々…。

年間の移動距離、それに要する時間は一体どれくらいなのだろう…。

東京都内で100km走れば大病院がいくつあって、その中に医者が何人いるのだろうと考えてしまいます。

やはり北海道は美しい憧れの土地だが「でっかいどう」で広すぎる！

私の妻が札幌で産婦人科医をしています。一度も私の士別のマンションに来たことが無いのは距離的なことが問題なのではないでしょうか？（笑）

私が院長になってからは、20km離れた（北海道では目と鼻の先）名寄市立総合病院との連携を徐々に深め、慢性期中心の「身の丈」に合った病院に改革を進めており、少しずつその成果も出ています。

新年を迎え、病院改革をさらに進める決意とともに、「還暦」なのだから、札幌に帰る片道200kmの車の運転が辛いのでJRにしようかなという、「強気」と「弱気」が混在している今日この頃です。

本年が会員の皆様にとってより良い年でありますように。

実り



函館市医師会
たんだ泌尿器科

小 野 武 紀

新年あけましておめでとうございます。北海道医師会より「北海道医報『新春随想』」、函館市医師会より「函医だより『子歳随想』」、ダブルで寄稿のご依頼をいただき、今年自分が48歳の年男であり、「ついている」と実感しております。私事ではありますが投稿させていただきます。

一昨年函館に居を構え、家庭菜園をはじめようと思ひ小さな庭をつくりました。初心者1年目の昨年はワイルドストロベリーを植えました。手間暇かけずともすくすくと成長し、初夏から秋にかけ鈴なりとなりました。外仕事をすると、清々しく甘い香りとともに一服の清涼剤のように味わい、収穫のさわりを感じることができました。

小石が多く、さらに水はけも悪く苔類が目立つ庭ですが、「庭でいろいろな野菜を育てて生活してみたい」という気持ちがあり、昨年は雑草取り、庭の土を掘り起こし、土作りをして「畑作り」の基礎をつくりました。今年はトマト、ミニトマト、ナス、キュウリを植える予定です。試行錯誤をしながらも、「実りの収穫」と思い今から春を待ちわび、わくわくしております。

平成31年4月より、故郷である函館の地で、現職の仕事させていただいております。これまでの病院勤務医時と異なり、外来と透析診療が中心となり、患者さん一人一人との距離が近くなり、接する時間が増えました。以前の病院より継続して受診していただく患者さんは、「気軽に相談しやすくなった」「ゆっくりと話ができるようになった」と、変化を「良かった」と捉えてくれています。微力ではありますが「地域に根ざす泌尿器科」を実践したく赴任し、スタッフとともに作り、発展させていきたいとやっておりますが、少しずつでも進んでいけるのではないかと感じております。

医師としての仕事、プライベートの家庭菜園ともに、「実り」のある1年にできるように、努力・前進していきたいと考えております。

土に帰る



江別医師会
江別市立病院

富山光広

冬の除雪、夏の除草や剪定、秋の枯れ葉の処理、冬囲いやその撤去まで、毎週末ごとにある何がしかの作業が徐々に面倒になり一軒家からマンションに移り住んだ。冬に引っ越したが、やはり除雪がなくて快適だった。

春になった。

そろそろ冬囲いはずす時期だなと思った頃には妙に土が恋しくなっている自分に気がついた。畑くらい借りられるのではないだろうか？

市民農園を探した。電話をかけると契約のために自宅に来いという。日曜日であった。

5×10mの区画はゴールデンウィーク明けから11月までの1年契約で1万円であった。「鹿とかアライグマがね…」ということばを聞いたような気がするが軽く受け止めていた。土が恋しいと思ってから数時間で土いじりが約束された還暦近い小生は多少舞い上がっていたのだろう。

春

ゴールデンウィーク明けから開園と聞いていたが、晴天の休みの後半に市民農園を覗いて見るとすでに大勢の農夫が鍬をふるっていた。のんびりと土をいじりたいという本来の目的がかすみ、なにか遅れをとったような気分が苛まれた。還暦近くになって道に迷わず天命も知ったはずであるが、いくつになってもダメなところは変わらない。

うろ覚えの知識を掘り起こし、石灰を入れ、元肥を施す。種をまき不織布をかける。虫の好きそうな葉物にはトンネル状に防虫網をかける。

不織布の下で枝豆やトウキビの芽が出てきたが、成長するにつけ苗はひん曲がる。早々に不織布はお役御免となった。

防虫網の中、葉物は成長するが雑草も成長する。葉は使わないと決めているので網を外して除草し、また網をかける。ベビーリーフは1ヵ月で収穫を迎えたためやはり網を外し収穫し、また網をかける。いつの間にか網の中に大量のコバエを発見する。防虫網はむしろコバエを閉じ込めていた。

防虫網もお役御免となった。

夏

ベビーリーフはメキメキと成長をとげ、採っても食べきれなくなった。ベビーリーフはベビーでなくなっていた。

まあいい。いっぱいできていることには変わりな

い。やがてトウキビと枝豆もそれなりの形になってきた。しめしめ意外とちゃんとできている。こんなにトウキビと枝豆がいっぺんにできたらとても食いきれるわけがない、困ったことだとやけていたのはちょっと真夏のピークが過ぎかかるところである。

そんなころあいつがやってきた。

鹿である。

みごとに枝豆の葉だけを食べていった。たしかに周囲では畑を囲むように網を張っていたのだが、動物の足跡も見あたらなかったのも完全になめきっていた。あわてて杭を打ち込み、網を張ってみた。なぜ周りはまだ作物もできていない春先から網を張っていたのかが身にしみてわかった。

猛烈に暑い。

農作業一年生は杭打ち網張りの作業を真夏にやるものじゃないことを思い知らされた。

しかし、その苦労をあざ笑うかのように2週間またあいつはやってきた。

せっかく立てた柵を押し倒し、網を蹴破って侵入した形跡がある。そして今度は葉ではなくトウキビと枝豆の実を食べていった。鹿はトウキビを押し倒し、もぎ取った実の先端から1/3程度までを次々と食べ散らかしていた。枝豆もちょうどふくらんだものだけ食べられている。おそらく前ははまだ実が熟していないと判断して枝豆の葉っぱだけを食べていったのだ。

やるな鹿。

スカスカの実だけが残った枝豆と運良く乱獲を免れたとうもろこし2本を持ち帰った。

「あら、前に言っていたより随分少ないのね」

妻の何気ない言葉が追い打ちをかける。

8月下旬、トウキビと枝豆の抜けた畑に、めげずに白菜の種を植えた。前後左右にむちゃくちゃでかい葉を展開しながら中央に葉が集まり始め、見慣れた形になってくる。白菜に対しては無情な無銭飲食者は現れなかった。

秋

今日は鍋にしようという話になり、ちょうどいい頃合いだと白菜を収穫するため畑に出掛けた。

「けっこうできているんだよ白菜、鍋で余った分は塩漬けだね」

といつつ車に乗った15分後、目の前に現れた光景に呆然とした。畑全面にトラクターが入り、土はすべて掘り返され、今年の畑が終了したことを物語っていた。よく考えたら先週が10月最後の週末であったのだ。

残念、白菜は土に帰っていた。

近所で1/4カットの白菜を買って帰った。

「あら、なぜ1/4カットになっちゃったの？」

妻へ答える代わりに苦いビールを飲み干し、ひそかにリベンジを誓った。

昭和35年3月 —60年前の思いで—



旭川市医師会
旭川高砂台病院

恩 田 芳 和

今年は子年、詳しくは「庚子」(かのえね)です。干支は十干十二支の組み合わせで60種類あり、60年で元に戻ります(10干×12支の組み合わせが120ではなく60なのは、お調べください)。それを還暦と言います。一般には60歳の時に還暦のお祝いを行います。今年が2020年ですから、60年前の庚子は1960年。昭和で言うと35年です。

当時私は小学5年生で、札幌の小学校に通っていました。当時の札幌は高度成長の入り口にあり人口も増え続けていましたが、いまだ50万人前後で、舗装されていない道も多く、砂埃や、雪解け時のぬかるみも当たり前でした。札幌の「馬糞風」が有名ですが、私が最初に通っていたのは桑園小学校で近くには札幌競馬場がありまして、桑園駅は札幌の物流のターミナルステーションで、荷役には馬車が使われ、馬糞が道に転がっているのは当たり前前の光景でした。

昭和35年3月は、私には思いで深い月でした。その前年の年末近く、某テレビ会社が児童劇映画を撮るためのオーディションに私の学校に来て、私を含む3人が選ばれました。他の2つの小学校からも3人ずつ選ばれ、それにテレビ局の児童劇団の数人とで、キャスティングが行われ、幸か不幸か私が主役となり、年明けからロケーションで撮影が行われ、3月には撮影が終わっていました。この映画は当時の国鉄の依頼で撮られたもので、30分ぐらいの児童劇映画でした。皆さんも小学生の頃、学校に巡回映画として、体育館や図書室で観たことがある種のものでした。

ロケーションは、冬の風景は定山溪沿線の豊滝、倶知安の近くの寒別、春の場面は伊達紋別等で、急ピッチで行われました。

一応撮影は終わりましたが、音を入れることは当時の札幌ではできず、いわゆるアフレコは東京で行わなければなりませんでした。

スタッフがフィルムを持って上京することになり、ご褒美という訳なのか、主役だった私を連れて行くことになりました。上京のスタッフは監督と助監督で、いずれも女性でした。

当時航空便はなく、上京には列車で行きました。蒸気機関車です。札幌出発は夜の7～8時頃だったと思います。列車は急行「まりも」。根室発函館行き長距離列車です。今は全列車が札幌発着になっていますが、当時は根室—函館とか函館—稚内とかの直通列車がありました。「まりも」の寝台車で、

札幌を発ち青函連絡船経由で、上野着は翌日の夜。記憶では26時間ほど掛かったと思います。宿泊はホテルではなく、テレビ局の東京駐在員のお宅でした。

この頃は東京と札幌の文化のギャップが大きく、この旅行でいくつかのカルチャーショックを受けました。最初に遭遇したのは、トイレでした。水洗便所です。当時の札幌ではくみ取り式、いわゆる「ドッポン便所」が当たり前で、少なくとも一般家庭に水洗便所はありませんでした。使い方を聞けば問題ないのですが、自分で何とかしようと、便座の上に乗っかり、いつものスタイルで用を足しましたが、当然上手く行かず、却ってお手を煩わせることとなりました。

音入れの後、調整などの閑があり、東京タワーに登りました。東京タワーは昭和33年にできたもので、できてからいまだ2年も経っていませんでした。当時は高層ビルもなく、眺めを遮るものはありませんでした。下りる時は階段を使いました。590段あるそうですが、当時の私にとっては何の苦もありませんでした。東京タワーに上がったのはこの1度だけで、その後は見るだけです。

当時のタクシーはダットサン・ブルーバードで、初乗り料金は70円でした。1,000ccの初代のブルーバードで、一回り小型の日野ルノー(750cc)は初乗り60円で走っていました。タクシーはこの2種類で、この頃から日産とルノーは因縁があったのでしょうか。

お金といえば、100円硬貨が昭和33年に発行されていましたが、当時北海道ではいまだ100円は紙幣(茶色の板垣退助)が主流で、硬貨はほとんど見たことがありませんでしたが、東京では100円硬貨がほとんどで、文化の浸透の差を感じたものでした。因みに当時の物価としては、菓子パンが10円、キュウリが3本10円、ラーメンが50円でした。この時鰻重を100円で食べた記憶があります。当然消費税はありません。

今年が東京オリンピックが開かれますが、昭和35年は東京オリンピックの4年前のローマオリンピックが開催された年で、カラーテレビやインスタントコーヒーが発売されたのもこの年です。ダッコちゃんが発売されたのもこの年でした。

庚子は五行的には「金より水を生じる」年で、行き詰まったものから新しいものを生む年だそうで、チャレンジのチャンス年だそうです。

行き詰まった社会や、行き詰まった政治、行き詰まった経済、国際関係などが打開されて明るい局面を迎えることを期待したい年となることを願いたいものです。

沢の焚火



胆振西部医師会
なかむら整形外科クリニック

中村 一孝

日高の沢で盛大な焚火をしたいとずっと思っていた。しかし、その途中の長い時間を考えると、開業している今の自分にはかなり努力しないと無理な話であった。

子供たちが小さい時分には、毎年裏洞爺の秘密の湖岸に行き、テントを張って湖の流木を集め焚火を楽しんでいたが、湖の国立公園内であると思うと小さな焚火しか創らなかった。

学生時代に創った焚火は大きかった。特に私が一年目の夏合宿で入った六ノ沢出合での焚火は大きかった。

静内川の上流であるサッシビチャリ川を遡行し、ヤオロマップ岳、コイカクシュサツナイ岳を経て、札内川上流に出たのは入山してから5日目であった。

朝から登ってきたこの沢は、親子と思われる熊の足跡が六ノ沢に向って続いており、私たち3人のパーティーはその恐怖に負けまいと大声を張り上げて登ってきたのだ。そして六ノ沢の出合の大きなトド松の下にその日の寝ぐらを決めた。熊避けの焚火を創る為、日没までのほとんどをかけてそこらじゅうの流木を集めて積んでいった。薪は小山のように大きくなった、だが、一晚中燃やすには充分でないと思われた。3人は汗をかきながら必死になって流木を集めた。

いつしか、熊への恐怖は流木を集めることに集中するあまり、巨大な焚火を創ることに転化し、それを創ることが目的に変わった。人工衛星から見える焚火を創ろう、と3人は本気で思った。

そして、その焚火は、ゴオーと高く高く燃え上がり、紅蓮の炎は日高の沢尾根を映し出した。沢の音と焚火の燃え盛る音だけが、そこにはあった。そして、私たちはしあわせであった。

翌日、六ノ沢を遡行し、十勝幌尻岳の山頂に出た。日高の主稜線が南北に連なり、夏の稜線はハイマツと高山植物のにおいがあふれていた。

ピリカペタン沢をかけるように下りていった。途中の出合で札幌山岳会のパーティーがテントを張っていた。医学部の中野君がその中にいて、お茶を入れてもらった。小さな焚火であったが居心地の良い所でひとときの山話をして、私たちはトツタベツ川を経て札幌へ帰った。

中野君はしばらくして山を止めた。

札幌山岳会はアラスカのマッキンレー峰で遭難

し、あのテントの中に居たパーティーは中野君を残して全員帰らなかった。

15年前の夏、私が言いだしっべとなり、日高の沢登りに行こうということになった。お盆休みを利用して2泊3日で登って、日高らしさを楽しめて、日高山脈の主稜線も見えて、焚火もできて、五十路の私でも登れる所、と考えたら、ピリカペタン沢が手頃ということになった。

山の会の後輩である、カメ、まっちゃん、岡やん、私の長男、そして私の5人で行くことになった。

日高町で落ち合い2台の車で十勝平野をつっぱしり、ピリカペタン沢に入った。

念願の日高の沢の焚火だ、日の高いうちから流木集めをして、いよいよ火を入れた。パチパチと燃え上がり、紫煙はわずかな川風によって川下に流れていき、木々の濃緑に溶けていった。

この日は、岩登りの聖地小樽の赤岩で、若き命を散らした宮下の命日であった。彼のお父さんから送られた三岳を飲みながら、彼との楽しかったことなどを話し、紫紺の闇は更けていった。

突然、カメが、宮下！と叫んだ。

宮下いるか！ あいつは居る、今ここに来ているよ。

宮下！ ここに来て飲もう！

カメの叫びは、焚火に照らされた川面を渡っていき、暗い沢音に消えていった。

カメは相当に酔って、テントに帰る河原で何度も転びながら、彼の名を呼んだ。

翌日の沢登りは大変であった。脚も、膝も、心臓も、心を除いてすべてが苦しかった。

身の衰え故に苦しかったが、グングン高度を上げる醍醐味と、日高の稜線においては、あざやかに三十年前の若かりし自分が感じたものと同じであった。

おわり

追記

古希を超えたので、いよいよ終活の準備をしようとして本棚の断捨離を行っていたところ、本の中に本文の元原稿が出てきました。15年前にフラテ山の会の部誌に投稿した文で、懐かしくなり、その場に坐り込んで読みだしました。ちょうどこの頃北海道医報からねずみ年生まれにつき、何か書くようにとの依頼があったので、山の会向けの元原稿を一般読者向に改変加筆し、本文をしたためた次第です。

現在、私は外洋ヨットレースにはまり、ロサンゼルス沖をスタートしホノルル沖をゴールとする、トランスパシフィック・ヨットレース(約2,200マイル)に出ようと準備中です。

あこがれなくして、我人生なし。

みなさん、魑魅魍魎なる大虎猫に踏みつけられないよう注意して生きましょう。注、注、チュウ。

団塊ジュニアの 独り言



札幌市医師会
ていね駅前泌尿器科

砂 押 研 一

この度は新年に年男となる会員の中で無作為に…ということで私に原稿依頼が来ました。当たりと言っているのか外れと言っているのかは分かりませんが、年男ということで思い浮かんだことを書かせていただきます。

私は昭和47年生まれ、いわゆる団塊ジュニアと呼ばれる世代です。世代人口は団塊の世代に次いで多く、1年間で生まれた子供が200万人以上いました。ここ最近では1年間で100万人以下ですから、いかに当時が多かったか、というか現在がいかに少子化であるのか身につまされる数字であります。しかも団塊の世代より大学受験率が高かったので、受験戦争が最も厳しかった世代とも言われています。さらにちょうど卒業する前にバブルが崩壊し、就職にも恵まれない氷河期世代=ロスジェネ世代とも一致します。

何だか書いていて腹が立ってきました。

思えば平成10年に医師となって以降、いわゆる「景気の良い話」というのは実体験ではなく全て人づてに聞いてきました。そして景気の良い話を経験しないまま「小泉構造改革」「リーマンショック」など、書くだけで不景気そのもののような事柄を目の当たりにします。そういえば、私の医師免許証の署名は、当時の厚生大臣であった小泉純一郎です。すいません、全く関係ない話でした。

さて、自分たちの世代についてまとめようとする、あまりに不景気な、可哀相な世代ということになってしまいそうです。最近の経済の観点からまとめるとそうなのかもしれません。しかし、本当に我々は可哀相な世代なのでしょう？ こうなると反論してみたくになります。

例えば同じ世代の有名人を挙げてみると、思いつくだけでも木村拓哉、中居正広、ホリエモン、高橋尚子、貴乃花、マツコデラックス、松井秀喜、イチロー…それこそ多士済済で、可哀相な感じは一切ないと思います。

そもそも我々は、日本が豊かになり出してから生まれた世代です。物心ついた時には普通にカラーテレビがあって、コンビニで買い物ことができました（ただし24時間ではなくそれこそ7-11時でしたが）。そう考えると、人生トータルでは経済的には各世代あまり変わらないのではないかと、いう気もしてきます。

我々世代が持つ長所を考えた時、私がひそかに一

番大きい長所ではないかと考えているのは、考え方に偏りが少なく、バランスのとれた人間が多いということです。

我々は物心つく頃、実際に体験した人から戦争の体験を聞く機会がありました。ひよっとすると、我々は戦争を経験した方々が元気なうちに、その方々から直接話を聞いた最後の世代なのではないかと思えます。そして社会人になってからは、学生運動を経験した方から仕事の指導を受けたりします。それこそ激動の人生を歩んだ世代から話を聞きつつ、しかし一方でパソコンや携帯電話、インターネットの普及に対応していったのが我々世代なのです。そのためなのか周りの同世代を見渡してみると、一昔前の考え方にも一定の理解を持ちながらしかし固執することなく、一方ではインターネットの便利さを享受しつつも過信することはない、というような人間が多い気がします。

現在の日本にはさまざまな問題が山積みで、今後先行き不透明といった感じがあります。しかしそんな状況も、これから担っていく我々世代のバランス感覚で乗り切っていくのでは？これから再び日本が自信を取り戻せる時代が来るのでは？などと期待をしております。そうでないと我々は大人になって以降、ずっと冷や飯食いで終わってしまいます！

今回は思いつくまま、都合の良い勝手なことをつらつらと書いてしまいました。団塊世代、バブル世代、ゆとり世代などその他の世代の方々も言いたいことは色々あるかもしれません。ですから今日書いたことはあくまで「独り言」としてとらえていただければ幸いです。



パックスジャポニカは 来るのか



札幌市医師会
札幌西の峰病院

山本 健治

思いつくままのまとまらない文章のほうが想像力を喚起すると、私の尊敬する精神科医：神田橋條治先生が述べられていたので、乱文のままをご容赦ください。

2011年の原発事故後、良くも悪くもこのような現在になっているとは思いませんでした。当時の私はIT音痴でしたので、TVニュースを頼りに4月に南相馬に行きました。すでにNHK職員は逃げ、地元には疎い若い自衛隊員たちと対照的に、ありのままの生活を送る人がいました。その後、日本近代史、マスコミについて考えはじめ、日本という国はなんなのかと歯がゆい気持ちが増しています。私の生まれは薩摩の圧政を受けた鹿児島の大隅という地方で、お上の言うことは絶対、軍国教育さながらの土地で、高校の修学旅行は山に放置された記憶があります。従順な国の下僕としてすくすくと育った私は過剰記憶の脳みそがあったので、三浦綾子の塩狩峠を読んだことを頼りに旭川医大に入りました。

さて、旭川には御料という土地があり、東の都として天皇家が関与したことや、旭川の永山という土地は鹿児島永山さんに由来することなどを最近知りました。

放射能については、やっと最近トリチウム水の問題が言われてきましたが、以前より村田元イス駐日大使が警告を鳴らしていました。まあ、イギリスのセラフィールド原発でもどこでも、汚染水を流してその辺の魚介は大きくなるのは有名です。その科学的見地、健康被害は政治利用されることが優先されることもあり、これ以上は言いません。

北海道といえば、外国による土地買収や水資源の収奪がひそかに行われ、ナマコやカニはあの国へ。また外国人留学生の優遇（日本人は奨学金破産、外国人は生活援助）が日本全国フラクタルではありますが、進行中です。

マスコミやwebに見られる最近の隣国叩きはかつての宗主国の分裂統治と武器売買の古典的手法が基底にあるように思います。隣国の甘えにノーと言えるようになったことは良いことですが、流されやすい日本人は要注意です。一億玉砕の再来は御免です。ウイグル弾圧や臓器移植問題など、現在の閉塞しつつも平和な日本を取り巻く世界的な視点を新聞などは報じてほしいものです。

うちの娘が12時までに行っている宿題を見ると、内容は貧困で意地悪ゲームのような問題です。勝ち残

るためのわびしい受験戦争に貴重な時間を費やしていることを親としては申し訳なく思います。いかにして生活していくか。世界や歴史を振り返れば、塙の中の「市民」にしか平等や人権はなく、奪い合い、殺し合いの歴史です。

勤労が悪で、金持ち父さんの書籍のような不労所得が賛美される西洋的価値観に違和感を覚えます。しかしながら、国益や外交に代表されるように、金融（工）学、帝王学、戦争論など、本当の学問は命がけの利益追求という現実があります。

さて、島国日本の田舎者の私は、黒潮にのって北海道に30年住んでいます。今は行き場のない老人の精神・身体管理センターです。親の年金がないと生活できない人、夜行バスの過剰勤務で疲労困憊の人、精神科医を超える知能で書籍を出版した人。いろんな顔が浮かびます。国、政治、経済のしわ寄せが医療に強く転嫁されています。ジャーナリストの堤未果が以前より警鐘していたTPP経済原理が恐ろしい速度で導入中です。日々実感します。

虎ノ門ニュースの武田邦彦先生が「男は生物学的に50歳以上生きる目的はない」と言っていました。希望ある日本に向けて50歳以上でも頑張っていけたらいいなと思っています。

将棋の世界では、いまだに新手、戦法が生まれています。対局者は安定した定石よりわざとカオスの局面に勝負を運んでいるように見えます。何か示唆的な印象を受けます。若手がAI研究で活躍する中、46歳でタイトル保持した木村九段など希望の星です。答えのない著しい速さで進む世界への対応のヒントがありそうです。医学の進歩も凄まじいと思います。しかしながら、人間自体はそんなに変わっていないように思います。有名な数学者岡潔は「人間の脳の首座は頭頂葉にあり、そこから生まれる情緒がもっとも大切である」と述べています。中今。今を生きることに込めるしかない、寄る辺なくも物事が明白にならんとする時代です。

パックスジャポニカ。日本大好きで日本の工場や職人業で活躍する外国人も増えています。アニメやポケモンなどのソフトパワーで世界を日本化するのがよいと思います。しかし、間に合わないかもしれません。首相が世界中でお金をばらまいて外交していますが、それでは世界に嫌われます。借りた相手は返したくないので、その国がなくなれば喜びます。中国と日本の債権国アメリカはやはり賢いですね。

皆様が素敵な1年をお過ごしになられますように。

我が国の 病院経営の今後



北広島医師会
北広島病院

竹内 實

私は平成元年から12年間北海道医師会役員として、故吉田信元会長の御指導を受けた。吉田先生の多くの功績の中で特筆すべきものを上げると、北海道私的病院協会を設立し、この組織の中で現在の介護保険の基礎調査を行い、厚労省が進めていた介護保険制度の設立に大きく貢献した。

北海道私的病院協会と北海道医療法人協会が母体となり設立した北海道病院厚生年金基金はその後30年あまりを経過し、厚労省の制度変更により解散、現在、北海道病院企業年金基金として存続、北海道医療健康保険組合と共に加入病院の福利厚生に寄与している。

北海道私的病院協会は全公私病院が加入できる北海道病院協会となり、全国でも有数の病院協会として活躍している。

吉田先生が団長の下、大道久日大元教授がコーディネーターとしてアメリカ合衆国病院施設研修に参加してから約30年、ちょうど現在の我が国の病院事情と相通ずるものがある。没後18年、先生は過去にたくさんの功績を残されたが、その中でも特に若手人材の育成が今も大きく生きている。

日本医師会には青柳、中川両副会長、北海道医師会の前飯塚会長、現長瀬会長の流れを残し、病院協会には急逝された後を引き継いだ、北海道病院協会徳田前理事長、全日病には長く会長を務めた前会長で現日本社会医療法人協議会西澤会長等、多士済々である。

過日「再編統合が必要な公立・公的病院のリスト」が厚労省より発表になり話題になっている。これらの病院は何らかの公的支援を受けて経営されている病院であり、我が国の財政状態を考えた時、何らかの対応が必要である。この問題はJR北海道の路線問題と相通ずるものがある。病院の連携や効率化でサービスの質を落とさず対応することが必要だからである。

私は医療法人理事長退任後、法人内に「医業経営研究所」を設立し、多くの医療法人の経営に参画すると共に公立病院の経営アドバイスも行っている。雄武町国保病院、土幌町国保病院は病棟再編成により病床稼働率を上げ、職員を効率的配置にして収益率を上げた。羅臼町国保病院はまず有床診療所に変更し、その上で孝仁会（釧路）との契約による公立民営の組織とした。現在、かつての国保病院時代よりはるかに内容の充実した医療を365日、24時間展

開している。

市立根室病院と小樽市立病院は病院改築に向けて移転を考えていたが、両方管理者に現在地での新築を進言し病棟の再編成も含めてアドバイスし、現在に至っている。

公立病院の多くが急性期病床を目指し、高い診療報酬を算定している流れが今も続いているが、急性期病床（7対1看護）は徐々に在院日数のしぼりや、業務内容のチェックが厳しくなり、その結果空床が多くならざるを得ない。当然病院経営が悪化することとなる。その地域の必要病床を再検討し適切な病床を選択すべきである。また生き残りをかけたダウンサイジングは経営改善の鍵でもある。

人口減少が進む北海道でどこの公立病院も経営に悩み、医師や医療関連職種確保に苦労している。そのうえ、入院病床の稼働率が悪く経営に苦慮している。もちろんこのことは公立病院だけではなく民間病院の場合、経営問題は倒産へとつながる。

診療報酬や介護報酬の改定の流れの中で、自院の取るべき病床の選択や効率的経営がこれからの病院経営に欠かせない。更に公私病院とも地域連携による生き残りを図ることが必要となる。平成19年第五次医療法改正で誕生した社会医療法人制度では法人税、固定資産税は非課税であり、社会医療法人債の発行が可能であるが、一定の設立条件が必要である。10年を経過し現在全国で300超が承認されている。この内で北海道は43法人と全国で一番多い。今後公私医療連携が進む時、その核となる可能性は高い。

全国で最も広く過疎化が進む中で病院経営を維持することは難しい。しかし地域に医療・介護がなくてはならないのも当然であり、いかに効率的に運営できるかが鍵となりそうである。そのためには公私病院共、各々に地域でどう連携を図るかが存続の鍵となりそうである。

惹かれた言葉



江別医師会
おおぬま小児科

大 沼 正 和

「個人とは社会的諸関係の総体（アンサンブル）である」

その昔、「アンサンブルステレオ」というものがあった。木目調、家具調のしつらえて、二個のスピーカーボックスとその間にレコードプレーヤーとかアンプとかFMチューナーなどが組み込まれたボックスからなる一体型のものである。

音を出すためには、各々が他のものと関係しあう必要がある。その前に各々が必ずある役割を担う「物」に置き換えられていなければならないのであろう。

「個人と社会を対立するものとして捉えてはならない」

その昔、「野球は個人競技である」と言われたことがある。確かに野球は、サッカーとかラグビーと比べると試合中に「個人的な時間」がより多く取れるような気もする。しかし、野球の試合において、一人ひとりの選手は守備位置とか作戦上での打順の違いはあっても、両チームのその時々諸事情を考慮して立ち振る舞っているのであろう。ここでもやはり、アンサンブルの観点が役に立ちそうである。

「そのとき、僕は二十歳だった。それが人生でもっとも美しいときだなんて誰にも言わせない」

これを読んだのは、私が二十歳の時であった。51年と少し前のことである。

まだ医学部ではなく理学部にいたその頃は、思った通りに行動に移すことができたように思う。ちょうど大学紛争の真っただ中で、「理学」を学んだ記憶はあまり残っていない。それよりも「文学」や「哲学」に惹かれていたように思う。デモとかバリケード封鎖とかの毎日の中で、何故か「『お上』を奉り、それ以外の生き方は許さないという人たち、根拠も無しに威張る人たちと自分さえ良ければそれでいいという人たちは許せない！」と怒っていたような気がする。

「他者は上下ではなく、対等として捉えよ」

当時の理学部では、実験器具など「欲しいものがあれば買えばいいじゃないか」とはなかなかいかなかった。自分たちで工夫して代用品を作ったりして

いた。2リットル入る大きなビール瓶の真ん中あたりを綺麗に輪切りにしたこともあった。試験管なども自分で作ることを試みたが満足のいくような物は作れなかった気がする。それでも、自分の頭で考えること、反省して再度試みることの大切さを教えられたように思う。「ガラス細工の職人さんたち」にはいろいろとお世話になった。縁の下の力持ちの職人さんたちの支えがあって初めて「研究」が成り立つのであろう。そう考えると、「自分たちは、頭脳労働者だから偉い」という発想は捨ててしまった方が良く思われた。あるのは「分業」ということだけなのかもしれない。

「あらゆる主義は反動である」

そんな当時、ひとりの先生がそうおっしゃっていたことを今でも鮮明に思い出すことがある。その先生は、私たちが卒業する時の「追い出しコンパ」で「君たちのように何でもかんでも権威というものに盾を突くような生き方をしていいたら、いつどこで野垂れ死にするか分からないから、今のうちに「お経」をあげておいてあげる」と言って、朗々と読経してくださった。

その先生は、自身の生きて来られた過程で、「大学などに残存しているような日本型の古い封建主義」を打ち壊したいと願ってきたのだと思う。「しがらみ」に囚われない「新しい人たち」の出現を待ち望んでいたのだと思う。私たちがそれに応えるような者たちであると感じて嬉しかったのであろうと私は勝手に思っている。先生から、目には見えないバトンのようなものを引き継いできたように思う。それをまた、次に来る若者たちに伝えなければならないと思っている。

私は理学部文学科哲学教室というところで二年間、そのような先生と「一人一派の（自称）暴力学生たち」に出会えたという奇跡の中で生きていたのだと思っている。

「自分だけの悩みとするな。（相手のあることは）相手との対話を通して問題として解決せよ」

「人々は自分が考えているよりもはるかに自由なのである。そして、人々が自明で真理だと信じているものは、実は歴史の特定の時点に作りだされたものであり、普遍的なものでも絶対に正しいものでもない。この見かけの上での自明性は批判し、破壊すること、覆すことができるものである」

私は、理学部にいた時の二十倍くらいの時間を小児科医として過ごしてきてしまった。しかしながら、どういうわけか私の夢は今でもたった二年間しかいかなかったところにいつも帰っていくのである。

北見から福山へ、 そして、北見に戻る



北見医師会
眼科・はっとり医院

菅原 亮一

今年が4度目の年男となる眼科医です。2017年3月に大学卒業後から20年間所属した旭川医大眼科医局を退局するとともに約9年間勤務した北見赤十字病院を退職し、広島県福山市の眼科クリニックに勤務することとなり、一家4人で出身地でもある北見市を離れ福山市に転居しました。福山には大学の野球部に福山出身の同期生がおり、岡山県倉敷市で開催された全医体の帰りに訪れたことがあったこと以外縁もゆかりもない土地でしたが、退局後の就職先を探していた際に求人情報であるクリニックが目にとまり、実際に見学と面談をさせていただいた印象がとても良かったのでお世話になることに決めました。私は北見市、妻は津別町と二人ともオホーツク管内の出身で、互いの両親も同管内在住ですが、当時、私としては良い就職先があれば全国どこへでも行くという気持ちでおりまして、気に入った土地があれば永住するという覚悟での転居でした。

福山市は人口が約46万人の広島県第二の都市で広島県と岡山県の県境に位置します。徳川家康の従兄弟水野勝成が築いた城下町としての歴史がありますが、現在は世界有数の規模を誇るJFEスチール(株)西日本製鉄所が町の経済の中心にあります。瀬戸内海に面した鞆の浦(とものうら)は、万葉集でも詠まれているかつて栄えた港の風情ある景色を今も残している景勝地で、ドラマや映画の撮影地としても有名です。まず駅に降り立つと目の前に福山城がそびえ立っており、歴史のある町であることを実感します。城下町らしく市内には所狭しと民家が立ち並んでおり、決して広いとは言えない土地の中に、たくさんの人々のエネルギーが凝縮されているような印象を受けます。福山は起業の精神にあふれた町ともいわれているようで、福山通運、洋服の青山、作業服のジーベックなど全国的にも有名な数々の企業が生まれています。私が道産子でのんびりしすぎているからかもしれませんが、福山の人々は独立自尊の精神が強く、歴史と伝統を重んじつつも新しい物事を積極的に取り入れようとする前向きな気持ちが強いという印象を受けました。私が就職したクリニックも最先端の医療をどんどん取り入れて前進し続けており、しかも院長先生は決して営利主義ではなく、ご自身のふるさとの人々が東京や大阪に行かなくとも最新、最良の医療を受けられるようにしてあげたいという熱い思いで真摯に医療に取り組まれていました。さらにはその姿勢はすべてのスタッフに

もまさにONE TEAMで見事に浸透しており、大変な衝撃と感銘を受けました。

自分も家族もそのような環境で生活しあるいは仕事をしていく中で多くのことを学ぶことができたと思っていますが、同時に自分の心の中には決して眼科医療が十分とは言えない自分のふるさと北見、オホーツクのことが常に浮かんできました。残りの人生は院長先生のようにふるさとのために尽力することが自分にとっては最良のかたちなのではないだろうかという思いが強くなっていきました。かなり悩みましたが、既に新たなスタートを切るには厳しい年齢になってきており、少しでも早く決断しスピード感をもって行動しなければならぬと考え、ふるさとに戻ることを決意しました。たった1年と4ヵ月という短い期間の勤務となってしまう、結果的に大変なご迷惑をおかけすることになりました。雇っていただいた院長先生には大変申し訳ない気持ちでいっぱいでしたが、院長先生は、クリニックで学んだ精神を胸にふるさとに戻ると私の気持ちを理解してくださり、快く送り出してくださいました。見ず知らずの土地に一家4人で引っ越してきて住宅のことや家族の生活や子供たちの学校のことなど、本当に親身になって相談に乗っていただき最後の最後まで面倒を見てくださった院長先生、事務長様、スタッフの皆様には今なお言葉で言い尽くせないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。医師としてのポテンシャルが違いすぎて院長先生の真似は到底できませんが、自分なりにできることを精一杯やって、ふるさとオホーツクに少しでも良い眼科医療を提供できるよう北見の地に根を下ろして頑張っていきたいと考えております。随分と遠回りしましたが、自分の志を実現するために、年男の今年2020年は大きく飛躍する年にしたいと思っています。



福山市鞆の浦『常夜燈』にて

地域医療への想い



上川北部医師会
名寄市立総合病院

酒井 博 司

この度、原稿の執筆依頼をいただいた時、私が目標とし、敬愛する医師である恩師が平成23年の新春随想に御年84歳で投稿された文章を思い出しました。

私は、子供の頃小児喘息を患い、小学校5年生までは、喘息発作によって、学校を休むことも多く、進級が危ぶまれる状態でした。私が生まれ育った所は、山奥の鉱山で人口が3,000人程の集落でしたが、当時そこに、内科、小児科、産婦人科、外科、整形外科などを一人でこなす医師がいました。今でいう、総合診療医です。喘息発作は夜間悪化することが多く、深夜、呼吸困難になり、子供心に死の恐怖を感じた時、白衣を着たそのスーパードクターが往診にきて、注射を一本打つと、呼吸ができるようになるのです。この体験は強烈で、私にとって、その医師は、命の恩人であり、憧れであり、やがて目標となりました。そして、医師を志す大きな動機となったのです。その先生は、鉱山が閉山となった後も、道北の地方病院に転勤し、総合医として活躍されました。88歳まで現役を通されましたが、私が現在の病院に赴任した後、体調を崩され、今度は、私が主治医として担当することになりました。医師となった私に、「お世話になるよ」と言って、嬉しそうに微笑んでおられた姿を今でも感慨深く思い出します。90歳で地域医療を支え続けた一生を終えるのですが、最期に主治医として関わられたことに不思議なご縁を感じています。

日本は、国民皆保険制度により、国民一人一人に良質な医療が提供され、世界一の長寿国となりました。この制度の理念は、貧富の差や住む場所の違いで受けられる医療に格差が生まれにくいことだと思います。しかし、現状は深刻で、地域医療は疲弊し、都会に比べ格差は大きくなる一方です。一人の医師を確保することすらままならない地方もどんどん増えています。医療は、電気、水道と同じく、人が住む上で必須のインフラ的要素です。地方創生が叫ばれていますが、地域医療の崩壊は地方創生にとっては致命的です。私は、山奥の過疎地で生まれましたが、幸い、そこに医師（恩師）がいて医療を受けられたから、命を繋ぐことができたと思っています。そのような経験もあって、私が生まれた翌年の1961年から始まった「いつでも」「どこでも」「誰でも」保健医療を受けられる国民皆保険制度の理念がこれからも守られること、それが私の変わらぬ願いとな

っています。

私が現在まで、15年間勤務している病院は、道北北部（上川北部、宗谷、留萌と遠紋二次医療圏の一部）の主に急性期医療を支える基幹病院です。この圏域は、医療資源が乏しく、広域で、まさに疲弊する地域医療の縮図といった地域です。その中で仕事は、正直、しんどいことも多々あります。しかし、先輩、後輩医師、コメディカルスタッフの中には、大変優秀で意識の高い医療人が、地域医療を守るため日夜奮闘しています。確かに地域医療にはさまざまな課題が山積していますが、志のある仲間がいる限り、課題は乗り越えられるものと信じ、これからも、同志と響働し、問題解決に向けて挑戦し続けていきたいと思っています。

最後に私が好きな高村光太郎の詩をそえて、筆を擱きたいと思います。

道程

僕の前に道はない
僕の後ろに道は出来る
ああ、自然よ
父よ
僕を一人立ちにさせた広大な父よ
僕から目を離さないで守る事をせよ
常に父の気魄を僕に充たせよ
この遠い道程のため
この遠い道程のため

尊敬する 村上幹雄先生



岩見沢市医師会
ささえるクリニック岩見沢

永 森 克 志

私が尊敬する医師は、当法人（医療法人社団ささえる医療研究所）の最年長87歳の村上幹雄先生です。幹雄先生は旭川の医師会でも最年長、今もなお現役です。村上内科小児科医院で毎日、午前外来、午後訪問診療を行っています。

幹雄先生は熊本大学医学部出身ですが、満州で過ごした幼少期のさまざまな思い、戦争体験もあり、北海道に渡り、北海道大学の医局に属して、地域医療を支える献身的な医師となり、数年ごとに北海道の片田舎をドサ回っていました。

当時の医師たちが身を粉にして、自身と家族を犠牲にしてでも、地域医療を支えていたことには、私たちが地域の人も改めて感謝しないといけないなと思っています。

その後の過酷なドサ回りで幹雄先生は体を壊す大病をし、静養のために大学を離れることになりました。息子3人を食べさせるためにも、しっかりとした教育を受けさせるためにも、都市部での開業を決意しました。知り合いを頼って、旭川駅から一駅先の神楽岡駅周辺という当時の新興住宅地エリアで村上内科小児科医院を開業しました。

以来50年間、『いつでも連絡していいから、我慢するんじゃないよ』という赤ひげ先生として、ずっと神楽岡地域を支えています。

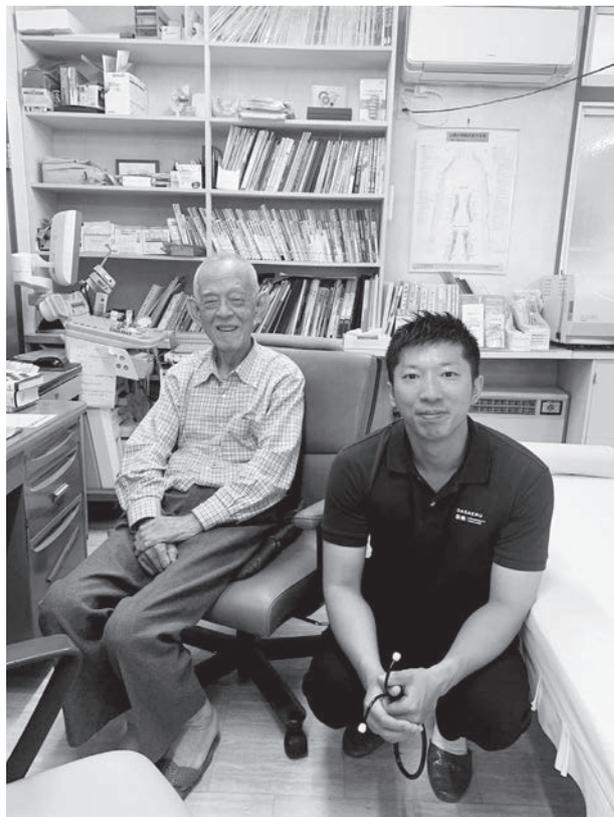
先日、大病院から村上医院に紹介され、退院して自宅に訪問診療をしていた患者さんがいました。農家で地元の名士の方でした。たくさんのお友達や仕事仲間、遠方に住んでいる息子さんたちと全員に笑顔で会えました。ご本人が大好きなたくさんの人に見守られ、ご本人のご希望通り、病院に戻ることなく最期まで自宅で過ごすことができ、穏やかなお看取りとなりました。自宅でのお看取りは不安だったご家族の方から「自宅での看取りがこんなに幸せな最期だと思いませんでした。痛みもなく苦しまずにスッと亡くなりました。入院中から家に帰したいと思っていたけど、家で見てくれる信頼できる先生がいなくて諦めかけていました。だから、村上幹雄先生には本当に感謝しています。できれば、もっと早くお会いしたかったです。それでも、家族一同の不安を取り除いてくれたうえに、本人の最後の希望を叶えてくれた幹雄先生には本当に感謝いたします」と話がありました。

また、ある日の話です。外来が終わる頃、往診依頼の電話が鳴りました。村上医院がかかりつけの男

性から、奥さんが転倒して動けなくなった、奥さんはかかりつけ医はないので困っている、という内容でした。「奥さんはうちの患者さんじゃないけど、神楽岡の住人じゃないか。時間外だけど、困っているなら行こう」という幹雄先生の一声で、事務も看護師も医師も全員で往診となりました。診察の結果はA型インフルエンザで、ベッドで寝て動けなくなっていました。トイレにも行くことができなくなっていたので、ベッド上は汗と排泄物で大変な状況でした。大柄な方で、旦那さんだけではどうにもならないので、スタッフと、なんと幹雄先生まで一緒になってシーツ交換等の介護まで行いました。事務員は診療内容記載や身体介護補助を懸命にこなし、看護師は医師付き対応からベッドメイキング等、手慣れた作業をこなします。幹雄先生は体動時に細かく全身状態を確認します。幹雄先生の合図で、皆んなで揃って「せーの！」の掛け声で、4隅のシーツの端を持ち、隣の綺麗なベッドに移し替えました。まさに村上医院総出で、一丸となつての時間外往診対応でしたが、幹雄先生は「皆んなで一緒に患者さんと地域を支えるっていいな～。患者さんの『ありがとう』が、ご褒美だな～」と嬉しそうでした。

このように、幹雄先生はお金に頼着せず、日々勉強し、少量のいい薬を処方し、患者さんに寄り添い、患者さんの生活と地域を支える医療をずっと続けてきました。

私の今の夢は、尊敬する幹雄先生にずっと現役で働ける体制のお手伝いをし、幹雄先生が日本医師会の赤ひげ大賞を受賞することです。



87歳幹雄先生と33歳佐川先生。年の差54歳